
訪れ

夜音森 想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
訪れ

【Nコード】
N6026P

【作者名】
夜音森 想

【あらすじ】

「君は僕のこの顔に惹かれたんだろう？ でもこれが魔法で作られた偽物で、本当は醜い姿だったらどうする？」

美青年の魔法使いハーヴェイはある悩みを抱えていた。しかしある女性に出会い、彼の人生は大きく変わってゆく。

※初回投稿時より行間を増やして可読性を向上させました。自作pdfもあります。

一（前書き）

初投稿時より改行を増やして可読性を高めました。

携帯の人にも読み易くなったと思いますが、その分タテ書き小説ネットからpdfをダウンロードすると少し不自然になるかと思えます。

加えてMacで作成したためか、タテ書き小説ネットでのpdfだと全角ダッシュ「？」が文字化けして「??」となっているためpdfを自作しました。

以下のアドレスからブラウザで閲覧もしくはダウンロードできますので、パソコン環境の方はそちらからお読みください。

<https://docs.google.com/viewer?all&pid=explorer&chrome=true&srcid=0B3WogQ7C4QIWMjE2ZmQwMDEtNmNhOC00N2FjLTg0DEtMGRhZmVlNmZkMDQ4&hl=ja&authkey=CN3JjKQB>

また、自作pdfには表紙と番外編の短編二編を付け、より文庫本っぽく仕上げました。一度読んでくださった方にもそちらで読んで頂けると幸いです。

人の多い町から遠く離れた山あいには、小さな家が一軒ある。魔法使いの母親と息子が二人で静かに暮らしている。

母親のシーナが作る菓はよく効くと、遠く離れた町から噂を聞き付けた人々が買いに来る。多くはないが、絶えず購入者が来るために暮らしには困らない。

息子のハーヴェイはいつも奥の工房か、外へ出ているかであまり客の相手はしないが、たまに人前に出ると、皆その姿に溜め息を洩らした。

絹糸を思わせる金色の髪、愁いを帯びた深い碧い瞳、長身ですらりとした四肢、男にしては細く長い指。そして何より整ったその顔立ち、時に同性をも魅了するほど美しい青年だった。そのため言い寄る女が多かった。

女本人は勿論、娘の婿にと母親からもよく口説かれた。しかし、彼はそれを積極的に受け入れようとはしなかった。それでも何人かに一人はしつこく食い下がり、熱烈に入れ込む女が出てくる。

すると彼は家に女を一晚泊めて、夜半に灯りを暗くした部屋で、こう問うのだ。

「君は僕のこの顔に惹かれたんだろう？ でもこれが魔法で作られた偽物で、本当は醜い姿だったらどうする？」

大抵の女は信じない。愛を試されているのだと思い、自分の想いはそんなことでは変わらないと答える。

それを聞いたハーヴェイは女の手を取り、自分の頬に当てる。そしてまた問うのだ。

「本当に……？」

女がうつとりとして問いに答えるのが遅れると、彼の顔はみるみる崩れていき刹那の内に醜い姿に変わる。ゴツゴツとした隆起に満ち、皮膚は赤黒く変色し、瞼はただれたように下がり、口唇の隙間からは猛獣のような歯が覗く。想像だにしまった姿になるのを見た女は突然の恐怖に震え出し、声が出ない。

ハーヴェイが手を離すと女は後退り、こう叫ぶ。

「ば、化け物……！」

それを聞くとハーヴェイはうなだれて静かに肩を震わせる。

「ははは、そうだよ。僕は本当は化け物なんだ。やっぱり君も口先だけなんだね」

女はますます恐ろしくなり、脚をもつれさせながらドアへと駆け寄る。

「分かったらもう、出ていってくれ！」

ハーヴェイがそう叫ぶと、真夜中にも関わらず女は慌てて逃げ出すのだった。

＊

ハーヴェイは元々美しい顔で生まれ、彼自身それが自慢でもあった。

子供の頃は町ゆく大人にはいつも器量を褒められ、買い物に行けば他の子には内緒だよ、と言っておまけをしてもらえた。同世代の子供たちは彼の持つ気品に他の子供とは違う雰囲気を感じ、反感はないが距離を置いてしまうほどだった。

ハーヴェイの父は優秀な魔法使いで、国家の公務に従事していた。しかし、身体を悪くしてからは公職を退き、シーナとともに薬屋を営み皆に慕われ暮らしていた。

父は息子の才能を見抜き、早くから様々な魔法を教えた。ハーヴェイも魔法が使えるようになるのが面白くて、のめり込んだ。

だがハーヴェイが九つの時に父親は他界した。ハーヴェイは尊敬していた父のように早く立派な魔法使いになりたいと一人でも熱心に本を読み、魔法を覚えた。

そして十二の時に禁忌の魔法に手を出した。

魔法使いとして、めきめきと成長をしていく彼は貪欲に魔法を求めていた。それが禁じられたものだと分かっているにもかかわらず、好奇心と自惚れに負けた。幼さ故に浅慮であった。

しかし、禁じられているものには必ず理由が存在する。未熟な魔法使いが手に負えるものではないという戒めに、古の呪いによって醜い姿に変わってしまったのだった。

息子のあまりの変わりように、シーナは絶叫した。禁忌の魔法の恐ろしい代償を初めて知った瞬間だった。

シーナは呪いを解くために考え得る方法は全て試したが、解けるはずもなかった。元々シーナは薬を作る能力には長けていたが、魔法使いとしては平凡な才能しかなかったために、彼女の力量ではどうにもならなかった。

ハーヴェイは己の変貌を周りに知られるのを恐れ、シーナに口止めをした。

そして部屋から全く出なくなってしまったために、忖度したシーナは親子二人で静かに暮らそうと、故郷を捨て今の場所に移り住んだのだった。

それからのハーヴェイは絶望と後悔に苦しみながらも、元の姿に

戻るため専心した。自宅にあるあらゆる書物を読み、研究に没頭した。

長い風霜を経て、なんとか魔法で昼の間は元の外見を保つことに成功した。

これに光明を見出した彼は完全に呪いを解こうと更に努力を重ねたが、未だ実らず夜更けには醜い姿に変わってしまったのだった。

そのため彼は青年へと成長した今でも尚、人との交流を恐れた。昼の間は笑顔で接してくる相手が本当は醜い姿だと知った途端に離れていくのではないかと感じたのだ。

姿が変わっても中身は変わっていないということを、きちんと受け止めてくれる人間が一体どれほどいるのだろうか、と。

しかし、母と二人の生活だ。この先彼女が死んだら孤独に生き、老いていくしか道はないのか？。そう考えると不安になった。

生涯を共にする伴侶を得たいし、子供も欲しい。老いた母の世話をしてくれるというのも大事だ。やはり結婚はしたいとハーヴェイは強く思った。

ハーヴェイの美しい外見に惹かれ、言い寄ってくる女は多かったが、なかなか醜い姿を晒け出せずにいた。

しかし、晩婚だったシーナは年々眼に見えて衰えがきている。いよいよ花嫁をと決心したハーヴェイは、好意を寄せてきている者の中から一番美しい女に交際を申し込んだ。

勿論受け入れられた。

その女は美しいものが好きで、きらびやかなアクセサリーや薔薇の花をこよなく愛し、またそれが似合っていた。

ハーヴェイも美しいものが好きだったので、女を好ましく思った。

周囲には美男美女でお似合いだとよく言われた。女は積極的に愛の言葉を囁き、将来は一緒になりたいと言うようになった。二人はうまくいっていた。

彼女なら……。そう思ったハーヴェイは初めて他人に醜い姿を晒した。女は悲鳴を上げて逃げ出していった。

その後も何人もの女が彼に求愛したが、美しい男が突然醜い顔に変わったが最後、皆恐怖に顔を歪め、悲鳴を上げて逃げ出すのだった。

繰り返される逃走にハーヴェイの心には深い傷ができた。最近では美しい姿が偽物で、本物は醜い姿の化け物なのだと自虐的に言うようになっていた。

＊

翌朝、朝食の席に息子しかいないことでシーナはまた女が逃げたことを知る。これで何人目だろうか。

「……あの子が外に出る前に、ちゃんと帰れるよう魔法をかけたろうね?」

「かけたよ」

真夜中に山から町へ、女一人でも無事に帰れるよう取り計らう魔法だ。如何に傷つこうとも、そこは紳士であった。

シーナはミルクをカップに注ぐと、向かいに座るハーヴェイの前に置いた。

「お前、どうしても嫁が欲しいのかい?」

「……そうだね。醜い顔を晒しても、逃げない人がいればの話だけだ」

ハーヴェイはシーナと視線は合わさず、皿の上のベーコンをナイフで切りながら溜め息混じりに答えた。

「この前、ライザの町から来た奥さんと話し込んでね。もう二十四にもなるのに娘の嫁ぎ先がないと嘆くんでお前の事情のことも話したら、うちの娘は絶対に逃げ出さないから、よかったらもらってくれないかと言ってきたんだ」

ハーヴェイのナイフを持つ手が止まった。視線をシーナに合わせる。

「絶対に逃げ出さない？」

「そう。絶対に」

「何故絶対だと言い切るの？」

「……それは、会えば分かるさ。会ってみるかい？」

ハーヴェイは好奇心を刺激されたので、早速会いに行くことにした。

ライザの町まで普通の馬では二時間はかかるが、馬に俊足の魔法をかけたので一時間足らずで着いた。ハーヴェイは外出の際は大概この魔法を使って移動する。

ライザは田舎ではあるが、大きな港町だ。市場もあり、喧騒に溢れている。

ハーヴェイは買い物などでよく外出はするが、異性と不用意に接触するのを避けるため極力大きな町には出向かない。ライザは初めて訪れる町だった。

「さて、と」

その娘の名はエクレナと聞いた。

ハーヴェイは馬を繋ぐと、手帳を開いて短い呪文を唱えた。すると紙には文字が浮き出した。人に尋ねずとも名前だけで家を探せるのだ。

本の示した家を目指し歩き出すと、町の人々は次々と振り返った。女たちはひそひそと噂をしている。

「ねえ、あそこ！ 物凄くいい男が歩いてる。どこから来たのかしら。ちょっと声掛けてきてよ」

「えっ、何で私なのよ」

「だって、あんないい男と目を合わせたら私、失神しちゃうもの！」
「私だって無理よ！ ああ、行っちゃった……」

ハーヴェイは手帳を見ながら一心にエクレナの家を目指していたので、喧騒に紛れたその声は耳に届かなかったが、届いたとしてもこの手の女たちのあしらい方は知悉していた。ただ、彼は接触しないで済むのならそうしたいのだ。

エクレナの家を訪ねると、シーナより少し若い女の子がドアを開いた。エクレナの母親だろう。彼女はハーヴェイの顔を見るとかなり驚いたようだったが、すぐに事情を飲み込んで家に招き入れた。

「娘は今、庭に。あんたの事情は軽く一度話ただけだけど、あんたさえよければあの子はすぐにでも嫁ぐ意思はあると言っているんだ。面倒見がよくてよく働く子だし、すぐに打ち解けられるはずだよ」

母親は愛想よく説明をすると、ハーヴェイを庭へ案内した。

そんなに物分かりのよい娘が、どうして今まで結婚できなかったのだろうか？

どうして醜い自分のところなんか嫁がせたいのだろうか？

もしかすると驚くほど酷い外見で、ずっと貰い手がなかったの
だろうか？

だとすると、醜い外見同士でお似合いとでも言いたいのだろうか
……。

庭への道すがら、ハーヴェイは想像を巡らせた。

庭に出ると若い女が一人、山羊の世話をしていた。赤毛で中肉中
背の、地味だがごく普通の女に見えた。ハーヴェイは心なしかほっ
とした。母親は静かにドアを閉めると、部屋に戻っていった。

ハーヴェイが近づくと山羊が先に彼に気付いて一度鳴いた。それ
を受けエクレナがハーヴェイの方を見た。

「突然伺ってすみません。ハーヴェイと言います」

エクレナは少し驚くと、はっとしたように慌てて髪を整え、服の
裾の汚れを払い、ハーヴェイに向き直った。しかし、眼は合わなか
った。

「エクレナです。初めまして。と、言っても私は眼が見えないので、
この挨拶が正しいのかどうか分からないのだけど……」

エクレナは少し困ったように微笑んだ。

なるほど、絶対に逃げ出さないというのはそういう訳か……。ハ
ーヴェイは全てを理解した。

「エクレナ、君はどのくらい僕のことを聞いているの？」

「ええと、魔法で薬作りを生業としていること。ここから少し遠い
西の山の方で、お母様と二人で暮らしていること。それからあなたの
顔は昼間はとても美しいのに、夜中には恐ろしい姿に変わってし
まうこと。それによって、とても深く傷ついていること。……この
くらいかしら」

深く傷ついている。この言葉にハーヴェイは反応した。何人もの

女が逃げ出したことも承知らしい。

「君は眼が見えないから、僕を恐ろしくはないということだよ。でも、それだけの理由で嫁ぐつもりなの？」

エクレナは寂そうに微笑んだ。

「……私はこんな眼だから、貰ってくれる人なんていなくて、すっかりいい歳になってしまったわ。妹は十八、弟は二十一で家庭をもったというのに……父も母も心配し通し」

そこで言葉を区切ると、座りましよう、とエクレナはハーヴェイを促した。自宅だからなのか、見えていなくとも足取りは慣れたものだった。

「二度ほど結婚の話もあったんだけど、やっぱり相手のご両親が嫌がってね。見えなくても音とか感覚で結構分かるのよ。最初に色々教えてもらわないとならないけど」

二人は山羊の小屋の前の簡素な椅子に腰掛けた。

「それでも子供が生まれたらどうするとか、色々不安が拭えないみたいで、結局破談になるの」

エクレナは俯いたが、気が付いたように慌ててハーヴェイの方を向き、続けた。

「十五の時、馬車に轢かれそうになってね。避けた時に転んで頭を強く打ち付けてしまって……。打ち所が悪かったみたいで、それから視力を失ってしまったの。先天性のものではないから、子供に遺伝することはないのよ」

「……うん」

ハーヴェイは最初黙って頷いたのだが、相手は見えないということとを思い出して、すぐに声に出し直した。

「あなたとなら傷ついてきた者同士、分かり合える部分が多いんじゃない」

やないかなと感じたの」

そう言うときクレナは前方に向き直った。山羊はのんびりと草を食^はんでいる。

「それに、困った時は魔法でなんとかしてくれるんじゃないかなって」

クレナはいたずらっぽく笑った。

「そう……」

彼女も自分と同じように本質を見てもらえることなく、不当な評価をされている。しかし、誰でもいいから縋りたいという訳ではなさそうだ。

ハーヴェイは警戒心を解いてクレナを見つめた。するとクレナもハーヴェイの方を向いた。彼女の眼は一見すると普通に感じる。しかし、よく見ると瞳がやや白く、鮮明でないのが分かる。本当に見えていないのだとハーヴェイは改めて認識した。

「魔法もね、万能じゃないんだ。薬を作るのが家業になってはいるけれど、君の視力を元に戻したりは……」

「違うの、分かってる。魔法でなんとかってというのは、冗談だから気にしないで」

クレナは慌てて手を振って笑った。

「ねえ、あなたのこと、もっと聞かせて」

言われてハーヴェイは、醜い姿になった経緯からぽつぽつと話し始めた。

クレナは相槌を打つ以外は、何も言わずに熱心に聞いていた。視力を失ってから人の話を聞くのが彼女の楽しみの一つであった。弟妹が実家を出てしまってから、話し相手が減ってしまい寂しく思っていたので、ハーヴェイの訪問は有り難かった。

そんなエクレナを見て、ハーヴェイは新鮮な感情を抱いた。言い寄ってくる女たちは皆自己主張が強く、話を聞くより聞かせたいという者ばかりだったからだ。

しかし、それを心地よさと呼ぶことに彼が気付くのは、もう少し後のことだ。

見えていなくともエクレナは途中途中、相手の顔の方を向きながら話を聞く。

それ故、相手は時折眼が合うように感じる。エクレナの瞳に映る自分の顔を見ながら、ハーヴェイは彼女の中では今、どんな自分が描かれているのだろうと、ふと思った。

けれどもそれは意味をなさないことだとすぐに思い直した。ハーヴェイは初めて外見に囚われぬ相手と話をしていると感じた。

それから二人は、お互いの生い立ちや好きなことなど、他愛のないことも含め色々な話をした。

ハーヴェイはエクレナをしつかりとした芯の強い女性だと感じた。エクレナは、ハーヴェイを少し子供っぽいが心根は優しい青年だという印象を持った。

「ごめん、長居したね。仕事を中断させてしまっていたし、今日は帰るよ」

山羊がひと鳴きしたのを聞いて、ハーヴェイは立ち上がった。

「また話せる？」

エクレナは座ったまま、少し寂しげな表情で問い掛けた。

「うん、また来るよ。いつだと都合がいいかな」

ハーヴェイは片膝を着いてエクレナの正面に座ると、手を握った。エクレナの鼻先に花のような優美な香りが漂った。ハーヴェイは香水をつけていた。

エクレナはいきなり手を握られたことに心臓がどきりとしたが、

紳士的な態度の表れだとすぐに気付き、少し自分を恥じた。

「ええと、明日は妹の家に行かなくちゃならないから、それ以外ならいつでも……」

「分かった。じゃあ明後日の昼過ぎに、また来るよ」

ハーヴェイはそう言ってエクレナに別れを告げて、庭を後にした。

エクレナはハーヴェイがまた来ると言ったことが嬉しかった。想像していたよりずっと話し易く、もっと彼のことを知りたいと思ったのだ。

ハーヴェイは家に入ると、帰宅の旨を伝えるため食卓に座っていた母親に声を掛けた。

すると落ち着かない様子だった母親は、驚いて立ち上がった。

「あ……あの子は眼が見えなくなっただけで、驚いて立ち上がった。きていてね。明るく振る舞ってはいるけど、本当は寂しいんだ。独りのあの子を見ていると不憫でね。もしあんたに結婚の意志がなくても、時々魔法で違う世界を感じさせてあげたりはできないかい」
母親はハーヴェイの腕を握るように掴んだ。

ハーヴェイは少し困ったように微笑んで、

「明後日、また来ます」

と、だけ言っただけでエクレナの家を後にした。

二

約束通り、翌々日にハーヴェイは再びエクレナの許を訪れた。

「ライザは大きな町だね。一度来たくらいじゃ、まだ何が何処にあるのかさっぱり分からないから、魔法がないと迷ってしまいかもしれない」

ハーヴェイが苦笑しながらそう言うのと、エクレナはくすりと笑って、

「じゃあ今日は町を案内しましょうか」

と、言った。

「眼が見えなくても大丈夫なの？」

「生まれてからずっとこの町に住んでいるんだもの。見えなくても、もう慣れたものよ」

エクレナは少し得意気に言った。

ハーヴェイは感心して案内を頼むとエクレナは杖を持ち出し、ハーヴェイを連れてライザの町を歩き出した。

馬車が通った時、ハーヴェイがさりげなく車道側に回ったことにエクレナは気付いたが、ハーヴェイは何も言わずにやり過ごすので、その紳士的な振る舞いを尊重しエクレナも何も言わなかった。

「ここがいつも買いに行くベーカリー。いい匂いでしょう」

「エクレナが買いに行くの？」

「そう。匂いで何のブレッドか大体分かるわ」

エクレナは笑った。

「隣は仕立屋。妹の花嫁衣装は母が作ったんだけど、生地はここで買ったの」

「へえ。お母さんは裁縫が得意なんだね」

「ええ。私も刺繍は得意なんだけど……」

暗くなるので、今はもうできないという言葉は濁した。

「こっちに行くと市場」

段々人が増えてきたが、エクレナの足取りは軽かった。

「賑わってるね」

ハーヴェイが見渡すと、突然横から大きな声がした。

「エクレナ！」

エクレナが立ち止まると、若い女が二人駆け寄ってきた。

「ちよっと、ちよっとエクレナ！　こちらは、だ、誰？」

ハーヴェイの方をちらちらと見ながら、背の高い方の女がエクレナの腕を掴んだ。

「紹介して！」

そばかすのある方の女が続いた。二人ともハーヴェイを見て興奮しているようだった。

「こちらはハーヴェイ。魔法使いなの」

エクレナはハーヴェイの方を見上げると、

「ハーヴェイ、こちらはブレンダと、リンジー。ブレンダは町長の娘で、リンジーはこの先の雑貨屋の娘なの」

背の高い方をブレンダ、そばかすのある方をリンジーと、エクレナは手を向けて紹介した。

「初めまして。ハーヴェイです」

ハーヴェイは品よく微笑しながら挨拶をすると、二人は同時に溜め息を吐いた。

「初めまして。私たちはエクレナとは古い付き合いなの。それで、ええと……エクレナとハーヴェイは、どういうご関係なのかしら？」

ブレンダがハーヴェイの方に尋ねた。

唐突に関係を訊いてくるなんて、随分不躰な女だとハーヴェイが驚いていると、エクレナが口を開いた。

「関係ってそんな、まだ知り合ったばかりでね……」

遠慮がちにそういうと、ブレンダとリンジーは小さく鼻で笑った。「そうよね。まさかエクレナがこんな美形と男女の付き合いがあるとは思えないし」

「魔法使いなんでしょう？　ねえ、どんな魔法を使えるの？」

エクレナを馬鹿にした二人の態度が気に入らなかったハーヴェイは、リンジーの質問を無視した。

「知り合ったばかりではあるけど、僕たちは結婚を前提に付き合っているんだ」

ハーヴェイが出し抜けにエクレナの肩を抱いて言い放ったので、エクレナは驚いて杖を落とした。

「結婚!？」

「嘘でしょ？　エクレナ」

ブレンダとリンジーは、予想だになかった展開に眼を白黒させながらエクレナに尋ねた。

「え、ええと……」

エクレナがしどろもどろになっているので、ハーヴェイは耳元でそつと囁いた。

「この場はとりあえず、僕に話を合わせて」

エクレナはハーヴェイの香水の馥郁とした香りと、耳に掛かる吐息にどぎまぎしながらも辛うじて声を振り絞り、本当はそうなのと言った。

「嘘!　だってエクレナよ?　眼が見えないのよ。あなた本気なの?」

ブレンダは納得いかないようにハーヴェイに問い掛けた。リンジも頷いている。

この女たちは何が言いたいのだろう。ハーヴェイは段々腹が立ってきた。

ハーヴェイは杖を拾ってエクレナに握らせると、不機嫌そうに二人に視線を送った。

「本気だよ。もういいかな。二人の時間を邪魔しないで貰いたいんだけど」

すると二人は気圧され、渋々道を開けた。

ハーヴェイは「それじゃ失礼」と言ってエクレナの肩を抱いたまま足早に立ち去ろうとした。エクレナが二人に向かって申し訳なさそうに、

「あ、じゃあ二人ともまたね」

と、言うのと、ブレンダは面白くなさそうに吐き捨てた。

「どうせ見えないんだから、不細工と付き合っていればいいのに」

ハーヴェイがエクレナを見ると、下を向いていたので表情は読み取れなかった。

何故何も言わないのだろう。腑に落ちないハーヴェイは、後ろは振り向かず歩きながら小声で呪文を唱えた。すると背後からブレンダが小さく悲鳴を挙げた。

「きゃ！ 何よ！」

「返しなさい！ 馬鹿鳥！」

何処からか鳥が飛んできて、ブレンダの髪飾りを奪って飛び去ったのだった。

「ハーヴェイ、もしかして魔法で何かしたの？」

悲鳴を聞いてエクレナが不安げに尋ねたが、ハーヴェイはその問いには答えずに歩き続けた。

「ハーヴェイ！」

エクレナがハーヴェイの腕を強く掴んだので、ハーヴェイは歩みを止めた。

「……鳥を使って着けていた髪飾りを外しただけだよ。ちよつと懲らしめてやろうと思って」

ハーヴェイが観念して白状すると、エクレナはハーヴェイを咎めた。

「そんなことをしては駄目。すぐに返してあげて」

「だって君は侮辱されたんだよ？ 何とも思わないの？ 大体何なんだあの二人は。失礼にも程がある。古い付き合いだとか言っていたけど、友達ではないよね？ 友達ならあんな態度はしないはずだ。何故エクレナは何も言わないんだ」

ハーヴェイが息巻いて矢継ぎ早に質問をするので、エクレナは困った顔をした。

「きっとハーヴェイが美形だから、嫉妬しちゃったのよ。根は悪い子たちじゃないの。お願い、返してあげて」

ハーヴェイは何故あの二人を庇うのか納得はしなかったが、エクレナが懇願するので仕方なくまた呪文を唱えた。すると髪飾りを銜えた鳥は旋回し、持ち主の頭上に髪飾りを落としていった。

「返したよ」

「よかった。ありがとう」

エクレナは、ほっとしたようだった。ハーヴェイはお礼を言われて複雑な気持ちになった。

「エクレナは、気にしないの？」

ハーヴェイがトーンを落としてもう一度尋ねると、エクレナはまた困った顔をした。

「……昔、見えないことで二人に迷惑をかけたことがあってね。身体に不自由な部分があることは、経験しないと分からない人の方が多いわ。それは仕方ないことだと思う。だけど嫌な思いをしたからといって仕返しや逆恨みをしては、自分を貶めるだけ」

「……」

ハーヴェイは己の子供染みた行為を反省した。無言のハーヴェイに気付いたエクレナは慌てて言い添えた。

「でも、ハーヴェイが怒ってくれたのは嬉しかった。ありがとう」

エクレナは優しくハーヴェイの手を握った。

「だけど、もう仕返しなんて子供みたいなことは駄目よ。あなたの品位を下げるだけ。それに魔法で人に害を及ぼすことは、法律で固く禁止されてるでしょう」

エクレナは子供を諭すような口調で言った。

「……ごめん」

「うん。素直で宜しい」

エクレナはいたずらっぽく笑った。

相手が年上だからだろうか。ハーヴェイは酷く自分が幼く感じた。女性を前にしてそう感じるのは初めてのことだった。

「さあ、行きましょう。案内の続きをするわ」

「うん」

市場に入り、エクレナは順に並ぶ店を案内をして歩いた。馴染みの店では店主の方からエクレナに声を掛け、彼女はそれに笑顔で応えた。場所と声で正確に相手を認識しているようだった。

「お父さん」

エクレナは魚を売っている店の前で立ち止まると、接客が終わった男に向かってそう呼び掛けた。

「おお、エクレナ」

髭を蓄えた男はエクレナに向かって破顔した後、隣に佇み自分を見ているハーヴェイに気が付いた。

「エクレナ、こちらは？」

「ハーヴェイ。一昨日、訪ねてきてくれた魔法使いの」

「ああ……」

父親が得心すると、ハーヴェイが挨拶をした。

「ハーヴェイです。初めまして。僕はこの町をよく知らないのですが、今案内をしてもらっているんです」

にこやかにそう言うと、エクレナの父親はハーヴェイの上品な香気と優雅な雰囲気にもまれたようで、口籠った。

「あ、ああ。大したものはない町だけど、ゆっくり見ていっておいれ」

生魚の匂いに包まれた店に、別世界が訪れたような感覚だった。

「じゃあ、仕事頑張ってね」

エクレナが小さく手を振って歩き出すので、ハーヴェイはもう一度父親に笑顔を向け別れの挨拶をした後、エクレナに続いた。父親は想像以上のハーヴェイの姿に、二人が去った後も、しばし呆然と佇んでいた。

途中、エクレナに子供がぶつかりそうになるのをハーヴェイが素早く肩を引き寄せ、回避させることが一度だけあったが、概ねエクレナは不自由なく歩いた。

「市場を抜けると港へ出るの。そこでは、おこぼれを貰おうと猫がたくさんいるのよ」

エクレナは前方を指差した。ハーヴェイがその方向を見ると、人波の隙間から僅かに海が見えた。

「本当だ。潮の香りが濃くなった」

港へ着くと漁夫たちが網を纏めていたり、荷物を運んだりしてい

た。そのそばには、エクレナのいう通り何匹もの猫がのんびりと寛いでいた。

「人間に慣れたものでね、ちっとも逃げないのよ」

エクレナが立ち止まると、白い猫が一匹擦り寄ってきた。エクレナはしゃがんで猫の頭から背中にかけて撫でてやると、猫は気持ちよさそうに身体を伸ばし、尻尾を立てた。

「少し休憩しましょうか」

「そうだね」

エクレナは猫に別れを告げて立ち上がると、近くのベンチを通り過ぎて、そのそばの石造りの階段の隅に腰掛けた。

「ベンチに座らないの？」

ハーヴェイが不思議そうに尋ねると、エクレナは笑って答えた。

「ベンチには人が座っていかもしれないけど、ここなら誰も座らないから」

眼が見えないとそういったことも考慮せねばならないのかと、ハーヴェイは冷たい階段に躊躇なく座るエクレナを見つめた。

隣に座る様子がないので、どうしたのかとエクレナはハーヴェイの名を呼んだ。するとハーヴェイは呼びかけには答えずに呟いた。

「……エクレナは立派だよね」

「え？」

「視力を失っても腐ったりしないで、前向きだ」

ハーヴェイのその言葉に、エクレナは遠くを見るような表情をした。

「……最初はずっと嘆いて暮らしていたわ。だって突然見えなくなるんだもの。見えないなんて信じられなかった。夢なら覚めてと毎日思ってた。でも、夢じゃないの。どんなに嘆いても治らない。気

付くと、家族みんなが暗くなってしまったの。このままじゃないかと思って、それから泣くのをやめたの」

ハーヴェイは黙って聞いていた。

「嘆いて暮らしても笑って暮らしても、同じように時間が過ぎていく。それなら、笑って過ごしたいと思っただけ」

エクレナは膝を抱えた。

「最初から気にしてなかった訳じゃないから、全然立派じゃないわ」
エクレナはハーヴェイの視線を憚るように俯いた。ハーヴェイはここでもうやくエクレナの隣に腰掛けた。

「……僕は未だに、本気で人を信用できない」

座るなり、ハーヴェイはそう呟いた。エクレナは顔を上げると、ハーヴェイの方に向けた。

「僕はエクレナと違って、自ら招いて醜い姿になってしまった。でも、許せないんだ。表面的なものしか見ないで勝手に好意を寄せておいて、醜いと分かれば逃げていく。その人間性が僕には許せない。でも本当は独りは嫌なんだ。なのに、近づいてくると避けてしまう。結局僕は、中身も醜いかもしれない」

ハーヴェイは初めて他人に惑う胸中を披瀝した。

「ハーヴェイ……」

エクレナは素直に本心を打ち明けるハーヴェイに好感を覚えた。母性本能をくすぐるというやつなのだろうか。何とか力になってあげたいと感じた。

「醜いと思えば、本当に醜くなってしまふ。やめた方がいいわ。でも、今そうやって悩んで考えるというのは、前へ進むために大事なことだと思う。大丈夫、必ず解決できるわ。自信を持って」

エクレナはハーヴェイの手を握った。それは恋愛感情でなく、家

族や同士に向けた激励のような感情であると自分では思った。

「エクレナ……」

ハーヴェイは手を伝って温かいものが内側に流れてくるように感じた。

「焦らないで。私に何かできることがあれば協力するから、遠慮なく言ってね」

エクレナは強さと優しさを交えて、ハーヴェイを励ました。

「ありがとう」

気が付くと、海風が少し冷たくなっていた。ハーヴェイはエクレナの手を握り返した。

「……また、来てもいいかな」

ハーヴェイは少し照れながらエクレナに尋ねた。

「勿論」

エクレナはハーヴェイの含羞に気が付いたが、それは赤裸々に感情を吐露したせいだと思い、微笑ましく感じた。

「エクレナは、何処に行きたいところはあるかな」

「うーん……」

エクレナはしばし考えたが、見えないので特に行きたいところはないと思いつかなかった。

「ハーヴェイにお任せするわ」

「分かった。次までに考えておくよ」

それからハーヴェイは頻繁にエクレナの許を訪れるようになった。

三

その日、ハーヴェイはエクレナを馬に乗せ自宅に向かっていった。エクレナと一度も会ったことがないシーナに紹介するためだった。

初めての乗馬にエクレナは、あまりの速さに落ちやしないかと冷や冷やしたが、すぐ後ろで手綱を引くハーヴェイの魔法に護られているのを感じた。

速いが、不思議と振動が少ないのだ。眼が見えなくても魔法を感じられるんだな、とエクレナは温かい気持ちになった。

「どう、どう！」

ハーヴェイが馬を止める。

もう着くなんて、さすが魔法ですぐ着くと言っただけのことはある……と、エクレナが驚いていると、

「まだ家じゃないんだけど、この辺の森は子供の頃から遊んでいた、僕の庭みたいなものなんだ」

ハーヴェイはそう言ってエクレナを降ろした。

エクレナも幼い頃はよく森で遊んだので、森の匂いは分かる。

「少し休憩しよう」

馬に乗るのに邪魔だからとエクレナに杖を置いてこさせたので、ハーヴェイは自らエクレナの手を引いて、ゆっくりと歩き出した。

木漏れ日が二人の身体を穏やかに照らす。鳥や虫の声、風が草木を揺らす音、地面を踏みしめる足音だけが聞こえる。晴れた日の森は、何者をも包み込む豊かな母性のようなものを感じる。エクレナは森の景色を想像しながら歩いた。

「知らない場所へ来たのは久しぶり」

エクレナが嬉しそうに呟くと、

「行きたいところがあれば、これからは僕が連れて行くから」と、ハーヴェイが言った。

思いがけない言葉にエクレナはハーヴェイの方を見上げた。

ハーヴェイは歩きながら優しくエクレナを見下ろしていた。エクレナの眼が見えれば、二人は見つめ合っていたことだろう。

「ありがとう」

エクレナは繋いだ手の温もりを一層優しく感じた。

ハーヴェイは森を案内して回り、魔法でエクレナを樹枝に乗せたり、リスと戯れたりした。エクレナは色々な魔法に触れて楽しんだ。

お腹が空いたのでそろそろ行こうかとハーヴェイが言うと、エクレナはお弁当を作ってきたとバスケットを差し出した。

「凄い。見えなくても、料理ができるんだね」

ハーヴェイは素直に驚嘆した。

「簡単なものしかできないけど……」

エクレナは期待されては困ると、恥ずかしそうに言った。

ハーヴェイは腰掛けるのにちょうどいい岩の上にハンカチーフを取りを出して敷くと、エクレナを座らせた。バスケットを開けると食事につられたのか、鳥たちが集まってきて二人を囲んだ。ハーヴェイがサンドウィッチの欠片を与えると、おいしそうに啄んだ。

「エクレナもやってごらん」

ハーヴェイはエクレナの手を取り、掌に細かくちぎったパンを置いた。

「きゃっ」

ハーヴェイの手が離れた途端、鳥たちは羽音を立ててエクレナの

掌に集まり、夢中でパン屑を取り合った。

「こんなに鳥が近くに来るなんて、初めて」

エクレナは楽しそうに笑った。

食事をしながら二人はまた色々な話をした。時間が経つのを感
じなかった。

＊

ハーヴェイの家に着いたのは陽が傾きかけた頃だった。

ドアを開けるとシーナは客の相手をしていたので、挨拶はいいか
らとハーヴェイが中に促した。

シーナは初めてエクレナを見るが、客を優先し、軽くお帰りの一
言で済ませた。

ハーヴェイの家は薬屋だけあって、様々な薬草や薬液の匂いに包
まれていた。

「不思議な匂い」

エクレナが呟くと、ハーヴェイは、

「工房には薬の材料がたくさんあるからね。この匂いが染み付いて
しまいそうだから、僕は香水をつけているんだ」

と、言った。

エクレナはハーヴェイの香水をつける理由が意外だったが、この
家の匂いは嫌いではなかった。

それに薬の材料が棚に所狭しと並んでいる様子を想像すると心が
躍った。エクレナの住むライザの町にはずっと魔法使いはおらず、
伝聞や物語の中の存在だったからだ。

エクレナは眼が見えていれば薬を作るところを見せて貰いたかつ
た。

この世界の魔法使いには血筋があり、修行を積みれば誰でもなれるものではないため、その数は少ない。天変地異を起こす大魔法使いなどの昔話はあるが、時代の変移で国により規制がなされてからは、魔法使いの殆どが薬を作って細々と暮らしている。やはり商売のし易い土地に集まるので、魔法使いの棲む地域は偏っていた。

ハーヴェイはエクレナの手を取り食卓まで通すと、椅子を引き丁寧な動作で座らせた。ハーヴェイは基本的に動作が優雅で紳士的だった。それが美貌の他に女たちが放っておかない理由の一つだったが、エクレナは自分が眼が見えないために極力丁寧に扱ってくれているのだと思っていたので、感謝こそすれ舞い上がることはなかった。

「お茶を淹れるよ」

ハーヴェイはそう言って短く呪文の言葉を口にした後、席に着いた。

ハーヴェイは明らかに椅子に座っているのに、後ろではカチャカチャとお茶の用意をする音が聞こえたので、エクレナはわくわくしながら聞いた。

「もしかして、魔法で淹れてるの？」

「さあ、どうでしょう」

エクレナが身を乗り出して聞くのがなんだか可笑しくて、ハーヴェイはわざとはぐらかした。

「意地悪ね」

エクレナはテーブルに頬杖をついた。ハーヴェイはくすくすと笑っている。

紳士的なのに、こういうところは子供なんだわ……と、エクレナが膨れていると、紅茶のよい香りがしてきた。

「カモミールには、鎮静作用があるから」

ハーヴェイは笑いながらハーブティーを差し出した。
鎮静化の必要を生んだのは一体誰だと思っているのか。エクレナは口を尖らせた。

「ミルクは？」

「頂くわ」

ゆっくりとカップにミルクが注がれる。

「さあ、どうぞ」

ハーヴェイがエクレナの手をそっとカップに導く。一口飲んで驚いた。こんなに美味しい紅茶は初めてだった。

「美味しい！」

エクレナは思わず大きな声を出した。

「そりゃあ、僕が淹れたお茶だからね。他では口にできないものも色々が入っているし」

ハーヴェイはわざと含みのある言い方をした。

「……」

エクレナは幼い頃見た絵本に、大釜で蜥蜴の尻尾や蛇の抜け殻やらをグツグツと煮ている魔女の挿絵があったことを思い出し、眉をひそめ二口目を躊躇う仕草をした。

すると、ハーヴェイの大きな笑い声が部屋に響いた。

……完全にからかわれている、とエクレナは思った。

「随分楽しそうじゃないか」

店を閉めたシーナが入って来た。

「だって母さん、エクレナの反応は一々面白いんだ」

ハーヴェイは涙を浮かべながら答えた。エクレナはちっとも面白くなかったが、シーナに挨拶をしていなかったことに気付いて、立ち上がった。

「エクレナです。本日はお招き頂きまして??」

ハーヴェイが突然エクレナの服の袖を引っ張ったので、言葉が途切れた。

「エクレナ、そっち母さんのいる方と逆だから」

「！」

エクレナは赤面した。大きな笑い声は二人分響いた。

＊

夕飯も食べていけとシーナが強く言うので、エクレナはそれに甘えた。

エクレナは何か手伝うと言おうとしたが、眼の見えない人間が初めての場所で台所に立つのは却って迷惑になると思って止めた。二人もそれが分かっていたので、ハーヴェイがエクレナの相手をし、シーナが腕を振るった。

エクレナは魔法で調理しているのかと気になったが、癪だったので決して聞かなかった。ところが厨房の方を向いては何か言いたげな表情をし、すぐにいやいやと制止していたので、何を思っているのかハーヴェイには明白だった。しかし、笑えばまた機嫌を損ねるだろうと、ハーヴェイは悟られないよう必死に堪えた。

食卓は久しぶりに賑わった。エクレナはよく食べ、よく笑った。ハーヴェイも珍しく饒舌になっているので、シーナは実に嬉しそうだった。

エクレナはハーヴェイが今まで連れてきたどの娘よりも垢抜けず、また息子より年上だったが、もし彼女が嫁いできたなら、昔のように明るく我が子の姿が日常に戻ってくるだろうとシーナは確信した。

たとえば生涯彼にかかった呪いが解けなかったとしても、エクレナ

となら嘆きを忘れて前向きに暮らしていけるのではないか。シーナにはそうも思えた。

魔法使いとして、母として、呪いを解いてやることも傷を癒すこともできずにいた彼女もまた、ずっと苦しんでいたのだった。

シーナは夕食を終えると早々と寝室に入り、ハーヴェイとエクレナを二人きりにした。

エクレナは暫くハーヴェイと居間で話をしていたが、そろそろ帰らなくては……と、切り出そうとハーヴェイの腕に触れた。

するとハーヴェイは真面目な顔つきになって、エクレナの手を握った。

「見えなくても、こうして触れていれば分かるんだ。僕が醜い姿に変わるのは」

ハーヴェイはそう言って、エクレナの左手を自分の右の頬にあてた。

「……」

きっとハーヴェイは今、とても悲しい顔をしているのだろう。月日が経った今でも夜が更けていく度に重い気持ちになるのだろうか。エクレナは殊勝な気持ちになった。

帰るつもりだったが、言い出す機会を逃した。いや、帰ってはいけない気がした。ハーヴェイの沈んだ気持ちを和らげなければならぬ。恐らくそれができるのは私だけだ。何故かエクレナはそんな使命のようなものを感じた。

二人は二階にあるハーヴェイの寝室に移動した。ハーヴェイは明らかに口数が減っていた。エクレナもまた、無理に話そうとはしなかった。

促され、エクレナがベッドに腰掛けるとハーヴェイも隣に座ったが、そのまま上半身を倒し仰向けになって天井を眺めた。

「少し……このままで」

小さく溜め息を吐いた後、ハーヴェイが呟いた。

エクレナは暫く黙って座っていたが、ハーヴェイと同じく上半身を倒し、仰向けになった。シートからはハーヴェイの香水の香りが出た。

静寂が続いた。

ここは山に囲まれた場所なので、夜は一段と静かだった。

どのくらい時間が経ったのだろう。エクレナは仰向けのままハーヴェイの名を小さく呼んだ。

ハーヴェイは横になったまま黙ってエクレナの手を取り、自分の方に身体を向けさせると、また頬にあてた。エクレナは僅かに構えた。

ハーヴェイが小さく震えた次の瞬間、彼の顔は崩れだした。

エクレナの手に伝わる質感がどんどん変わっていく。滑らかな肌触りがゴツゴツとした硬いものになり、隆起に満ちた。樹の根のような、固く乾いた土のような、それでいて岩のようでもあり、不思議な感触だった。

しかし、恐ろしくはなかった。そこには確かに体温があり、血が通った人間であることは間違いないかった。

「分かるかい……？」

ハーヴェイは小さな声でエクレナに尋ねた。

エクレナは空いているもう片方の手を伸ばし、両手で確かめるようにハーヴェイの頬を撫でた。

何も見えない。

そう、私には見えないのだ。……しかし、見えたとしても。

「ここにいるのは、ハーヴェイ」

そう言ってエクレナは両手をゆっくりと移動させ、ハーヴェイの頭を包み、自分の胸元に引き寄せた。

エクレナは自分でも不思議なくらい落ち着いていた。子供を抱擁する母親の心境だったのかもしれない。

ハーヴェイは何が起きたのかすぐに理解できなかった。眼を見開いたまま黙って抱かれていたが、ややあってから小刻みに肩を震わせ始めた。静かにエクレナの胸元を濡らしていく。ハーヴェイは声を殺して泣いていた。

失明した時はただ絶望を感じただけだったけれど、今初めて盲目である自分の価値を感じることができた気がする??。エクレナは涙する相手を胸にそう思った。しかし、何も言わずに、ただハーヴェイの頭を撫で続けた。

＊

「おはよう」

エクレナが目覚めると、頭上からハーヴェイの穏やかな声がした。朝の光が頬を照らしているのを感じた。いつの間に眠ったのだろう。エクレナはまだぼうっとしながらも挨拶に応えた。

「おはよう……」

「いい天気だよ。洗面所まで案内するから、顔を洗っておいで」
明るい声にエクレナは、ほっとした。

上半身を起こすと、ハーヴェイが手を取った。ゆっくりと階段を降りると、左手にあるドアを開けて洗面台まで導かれた。

「顔はこれで拭いて」

「ありがとう」

「トイレットはすぐ右だから。済んだらドアを出て、壁伝いに左に進むと食堂に行ける。あ、言わなくてもエクレナなら朝食の匂いで、すすい来られるかな」

ハーヴェイは憎まれ口を利いた。

「それは私が食い意地が張っているって言いたいの？」

「だって、昨日の食べっぷりは……」

「あれはシーナさんの料理が美味しかったからで、いつもはあんなに食べません！」

エクレナは赤くなった。確かに昨日は少し食べ過ぎていた。

「ふうん。それは母さん喜ぶなあ」

ハーヴェイはまた含みのある言い方をした。

エクレナは堪らずハーヴェイの胸元を力を入れずに両手で何度も叩いた。ハーヴェイは笑っていたが、エクレナがふと何かに気付いたかのように動きを止め、両手でハーヴェイの頬に触れたので、はっとした。

「……」

夜が明ければハーヴェイは、自身で魔法をかけて本来の美しい顔に戻る。

エクレナが何を考えているのか察し口を開こうとすると、思いもよらない挙動で止められた。

エクレナは両手の親指と人差し指に力を込め、ハーヴェイの頬をつねったのだった。

「い……！」

ハーヴェイは痛いと言おうとしたが、両の頬をつねられているので、きちんと口が開かなかった。

「私は決して大食らいじゃないから。そして、紳士は淑女に向かつてそんな口利かない」

エクレナはにっこり笑って、そう言った。

「は……い……」

「分ければ宜しい」

エクレナは手を離すと何事もなかったかのように蛇口をひねり、顔を洗い出した。

「……」

予想外の出来事にハーヴェイは痛む頬を押さえることもせず、呆然とした。年上の女とは、こういうものなのだろうか。

シーナは上機嫌で朝食の支度をしていた。

今二人は洗面所にいる。うちで一晩明かした女はエクレナが初めてだ。やはり私の予想は外れることはないだろう。

そう思うとシーナは鼻歌を歌い始めた。焼き立てのベーコンエッグをフライパンから皿に移すと、ハミングしながらテーブルの上に置いた。そこに頬を擦りながらハーヴェイがやってきた。

「ん？ お前、頬がどうかしたのかい？」

「いや、なんでもない……」

ハーヴェイはばつの悪い顔をしながら席についた。

「エクレナは？ 一人で大丈夫なのかい？」

「用足しをしている時も、そばにいられたら嫌かなと思ったから」

「じゃあ、私が行くよ」

シーナが洗面所に向かおうとすると、エクレナが兵隊のように両手両足を規則正しく動かしながら入ってきた。

「ハーヴェイ、一言言つてよ！」

エクレナは自分の意思で動けずにいた。ハーヴェイが一人でも問題なく食卓まで来られるよう魔法をかけていたのだった。しかし、少々悪ふざけが混じっている。

エクレナがくると回りながら席に着くと、ハーヴェイは無言で指を鳴らした。同時に彼女への魔法が解けた。

「ハーヴェイ！」

「お礼は言われても、文句を言われる謂れはないな」

「だから一言……！　びっくりするじゃない！」

「頬をつねられた僕もびっくりしたよ」

わあわあと言いつている。

この二人は朝から何をやっているのか。シーナは呆氣にとられた。

「まあ、仲良くなるのに越したことはないけどね……」

シーナはそう独りごちて、台所に戻った。

四

ハーヴェイはすっかりエクレナに心を奪われていた。それは彼女が見た目に左右されないからではなかった。

言い寄ってくる女性の扱いは大方心得ていたが、エクレナのような女性は初めてだった。年上の包容力を見せたかと思えば、少女のように膨れる。見えていないとはいえハーヴェイが触れても、うつとりすることもなく涼しい顔をしている。

最初は調子が狂った。だが彼女といると不思議と安心するのだ。会えない日は何度も溜め息を吐き、気が付くとエクレナのことばかり考えている自分に赤面した。こんな経験は今まで一度もなかった。

エクレナは美しい女性の持つ華やかさも、艶麗なしぐさも持ち合わせてはいなかったが、そんなことはどうでもよかった。本気で人を愛するということはこういうことなのだろうか、とハーヴェイは胸を焦がした。

ハーヴェイがエクレナに会いにライザに赴くと、時偶ブレンダとリンジーに出会すことがあったが、ハーヴェイはその都度社交辞令でうまく躲^{かわ}した。

最初は魔法で遠くに追いやろうかと思ったが、エクレナの言葉を思い出してそれは止めた。

ブレンダたちはハーヴェイが足繁くエクレナの許に通うことで、二人の交際が嘘ではなかったことが決定的となり、ハーヴェイを興味の対象から外したようだった。

ライザの町では盲目のエクレナに美形の恋人ができたと言われなっ

たが、ハーヴェイは歩き辛さから次第に人目を避けてエクレナを町から連れ出すようしたので、噂はそれほど長くは続かなかった。

＊

ある日ハーヴェイは、静かに二人きりになれる森にエクレナを連れ出すと、奥に向かって歩き出した。

手を引かれながらエクレナは、いつもよりハーヴェイが速歩はやあしであることに気が付いた。

「ハーヴェイ、今日は歩くのが速いみたい。何かあった？」

ハーヴェイは驚いて歩みを止めた。全くの無意識だった。

「ごめん、気が付かなかった」

「ううん。大丈夫なんだけど、何かあったのかなって」

エクレナは不思議そうにハーヴェイの顔の方を向いている。ハーヴェイはその場で一度深呼吸すると、意を決したようにエクレナの手を両手で握った。

「エクレナ、僕は君といると、とても安らぐんだ」

唐突な発言に驚いたが、その内容にエクレナはすぐに笑顔になった。

「そう言われると嬉しい。ありがとう」

「エクレナとずっと一緒にいたいんだ」

ハーヴェイは真剣に伝えた。

「つまり、君と結婚したい。年下だし頼りないかもしれないけど、眼が見えなくても僕が支えになる。いや、なりたいんだ」

想いの強さを表すかのように、握った手に力を込めた。

「ハーヴェイ……」

エクレナは正直なところ、ハーヴェイと結婚することはないと思っていた。結婚願望はあったし、母親からハーヴェイの話を聞いた

時は将来を心配する両親のことを第一に考え、そこに愛がなくとも嫁ぐつもりだった。呪いで姿が変わろうとも、眼の見えぬ自分には関係はないと思った。

しかし、何人もの女性が逃げ出したというのだから姿のことだけでなく、きつい性格で気難しいのではないかという点は心配だった。ところが実際に本人と話をしてみても、拍子抜けした。実体は幼さの残る傷ついた普通の青年だったので、なんだか放っておけなくなった。

エクレナはハーヴェイの優雅な振る舞いや時々みせる強引さに、どきりとすることはあっても、盲目の自分に対する他意のない行為だと思っていたので強く惹かれることはなかった。

しかし、初めてハーヴェイが変身した姿をエクレナに曝け出した後、状況が少し変わった。ハーヴェイは警戒心がなくなり、エクレナに懐くように接するようになった。それを受けエクレナは徐々に絆され、必要とされることに歓びを感じるようになった。

その内にエクレナも強くハーヴェイを求めていることに気が付いたが、自信を持てずにいた。女性慣れしている彼が、美しくもなければ何の取り柄もない自分を本気で好きになるとは思えない。心の傷が癒えてしまえば、きっとこの人は去る。恋愛感情を持つてはならない。そう自分に言い聞かせるようになっていたのだ。

エクレナは顔を上げると、心から微笑んだ。

「ありがとう、とても嬉しい。私もハーヴェイとずっと一緒にいたい」

ハーヴェイはエクレナの長い沈黙に気が気でなかったが、返事の内容に顔を輝かせると反射的にエクレナを強く抱き締めた。

「よかった。断られたら、立ち直れなかったかもしれない」

ハーヴェイは、ほっとしたように呟いた。するとエクレナは照れ隠しに、

「じゃあ嘘について、最初は断ってみればよかった」

と言ったので、ハーヴェイが驚いてエクレナの身体を離すと、エクレナはくすくすと笑い出した。

ハーヴェイは苦笑すると、もう一度エクレナを抱き締めた。

そうしてハーヴェイとエクレナは結婚した。

式はハーヴェイの家の前の丘で、晴れた空の下咲誇る花の香りに包まれて行うことにした。ライザの町では以前噂が立ったこともあり、噂好きの住人に変な関心を持たれては嫌なのでこちらで式をできないかと、エクレナの両親から打診されたのだった。

エクレナは事情を知らなかったが、何も見えないので室内よりも香りや風を感じられる屋外の方が却ってよかった。

「もう終わった？」

「終わったよ」

支度が終わったかどうかハーヴェイが確認しに来たので、着替えを手伝ったシーナは席を外し、一足先に表に出た。

「エクレナ、綺麗だよ」

ハーヴェイは純白のドレスに身を包み、鏡の前に座っているエクレナの手を取ると、跪いて口づけた。

「ありがとう」

エクレナは微笑んだが、シーナが施してくれた化粧も、母の手製のドレスに身を包んだ自分の姿を見ることも叶わない現実が少し寂

しかった。

そしてハーヴェイもいつにも増して美しいのだろう。エクレナは切なくハーヴェイの顔の方を見つめた。

「どうかした？」

「うん、何でもない。私、幸せよ」

エクレナはハーヴェイに強く抱きついた。

こんな自分を愛し貰ってくれる相手に巡り会えたのだ。それ以上何を望むというのか。エクレナは眼を閉じて自分を戒めた。

「うん、僕も」

同じくハーヴェイも今、エクレナの眼が見えないことを寂しく感じていたが、見えないことで結ばれたのだという思いの間で揺れていた。

ハーヴェイはエクレナの腰に手を回し、二人同時に立ち上がると、呟いた。

「エクレナ、魔法をかけるよ」

「??? 何の魔法？」

思いがけない言葉にエクレナは顔を上げた。

「今日が永遠に焼き付く魔法」

ハーヴェイの返答にエクレナは瞠目した。心の中に焼き付けて忘れはしない。それを魔法と呼ぶのなら、とても素敵な話だと微笑んだ。

ハーヴェイはエクレナを抱き締めたまま何か呪文を唱えると、そのままエクレナの唇に優しく口づけた。

参列者はお互いの親族と、ハーヴェイの家に菓を買いにやって来て、居合わせた客のみの小さくひっそりとした式だった。

シーナは時折涙を拭った。エクレナの母親はずっと泣いていたので、それをいたわる父親の方は泣くに泣けず、堪えざるを得なかった。エクレナの妹と弟も自分たちの家族を連れて祝福した。

居合わせた客の中には、花婿の方が遥かに美しいので地味で垢抜けぬ花嫁が不釣り合いに見える者もいた。しかし、幸せそうな二人を見て不粹な思いをすぐに恥じた。

風薫る、美しい春の丘での結婚式だった。

＊

エクレナはハーヴェイの家で暮らし始めた。

慣れるまでハーヴェイが壁などにぶつからないよう回避の魔法をかけてくれたのもあって、エクレナはよく働き、ふた月ほどで薬を買いに来る客の相手もできるようになった。

結婚後のハーヴェイは憂いが薄れ、客を避けることがなくなったため以前よりも女たちを魅了した。

常連客には愛想よく世間話をするようにまでなったので、女たちはこぞって話す機会を争った。姿が見えなければエクレナに所在を尋ね、すぐに戻る気配がなければ落胆した。

しかし、眼の見えぬエクレナが真摯に働いている姿を見ると、彼女から奪い取ってまでハーヴェイとどうにかなりたいたいと思う者はいなかった。

穏やかに毎日が過ぎていった。

ハーヴェイは魔法がなくても色々と動けるようになったエクレナ

を見て、ある晩食事の手を止めてこう言った。

「前から考えていたんだけど、エクレナもここでの暮らしに慣れたことだし、僕は城つきの魔法使いの元で助手として働こうと思うんだ」

城つきの魔法使いとは、その名の通り城について国の治安や医療への貢献のために、魔法の研究・開発及び記録などに従事する。優れた功績者ならば、王の計らいで時に政治に関わることもある。

当然誰にでも勤まるものではなく、高い魔法の能力を持ち合わせていることと、成人した男性であることが条件だった。

ハーヴェイは元の姿に戻るため日々研究は欠かさないし、十二歳で禁忌の魔法に手を出したくらいだ。元々魔法使いとしての能力は高い。

「もし採用されれば、給料も高いし、暮らしも楽になるよ」

「今の暮らしで私は充分だけど、ハーヴェイがやりたいのなら飲んで賛成するわ」

エクレナは言った。

「でもお前、何日も帰ってこれないことだってあるだろう」

シーナが懸念した。

彼女の夫、つまりハーヴェイの父親は、もともと城つきの魔法使いだったので、ある程度の内情は知っている。

「うーん、でも夜中に顔が変わることは最初に説明しておけば、皆魔法使いだから理解があるはず。大丈夫だよ」

「お城の研究室で、呪いを解く方法が見つからないかしら」

「そこなんだよ。あそこなら優秀な魔法使いが集まっているし、膨大な数の資料があるはずだから、仕事の合間に調べられないかと思っっているんだ」

考えが重なってハーヴェイとエクレナは飲んでいる。

シーナはハーヴェイの顔が変わることではなく、エクレナと離れることを懸念したのだが、当のエクレナがハーヴェイに賛同しているので、口を噤んだ。

「エクレナも賛成してくれたし、決まりだね」

「私もうちの仕事、頑張るわ」

ハーヴェイは安心したように食事を再開した。シーナは消化不良の感があったが、水を差すのも気が引けたので、何も言わずにやり過ごした。

＊

翌日ハーヴェイは朝から城へと向かった。城まではここから俊足にした馬を使っても片道二時間ほどかかる。山あいの家はどこへ行くにも距離があった。

ハーヴェイは城下町に降り立つと、馬を繋ぎ城門まで歩いた。その間、例によって何人もの住人が振り返ったが、ライザの町より都会であるため人の出入りが多く不用意に騒ぎ立てる者はいなかった。

城に着くと、入城手続きを済ませるよう門番、兵士、事務方とやり取りをした後、召使いに案内され、やっと研究室に辿り着いた。

「上官殿、助手の試験を受けに来た者をお連れしました」

「入り賜え」

扉の奥からは厳肅そうな男の声がした。

「失礼します」

ハーヴェイが召使いと共に中に入ると、前室のような小さな部屋に上官と呼ばれた年配の男が一人机に向かい、書き物をしていた。

頭髮も顎髭も白く、気難しそうに見えた。

「ハーヴェイⅡラドウィックと申します」

ハーヴェイが自己紹介すると、召使いは一礼をして退室した。男は書き物の手を休め、ハーヴェイの顔を見つめた。

「私はこの研究室で人事を任されているフアビウスだ。では早速だが、君のことを少し教えて貰おうか」

フアビウスはそう言うのと、席に着いたまま左手をハーヴェイにかざし、呪文を唱えた。

するとハーヴェイは金縛りに合い、直立したまま身動きができなくなった。

「……！」

ハーヴェイという人間の情報を、かざした掌にすると吸い込んでいたようだった。その間ハーヴェイはまばたき以外の自由を奪われ、ただフアビウスを見つめるしかできなかった。

「あい、分かった」

右手が下ろされたと同時にハーヴェイの金縛りも解けた。

「君はオーウェンⅡラドウィックのご息か。そして古の呪いにかかっている」

ハーヴェイは息を飲んだ。これほどの魔法を見たのは初めてだった。

「……はい。仰る通りです」

「そう固くならずともよい。何もこの魔法は心の中を読むものではない。あくまで一人の人間の軌跡を読み取るものだ」

「そうですね……。しかし、驚きました。習得するにはかなりの修練を積みねばならぬ魔法なのではないですか」

「まあ、誰でも使えるものではないな。そんなことより君がここへ

来た理由は、その呪いを解くためということでもよろしいかな」

ファビウスは目線を机に戻し、書き物を再開した。

「第一は自身の成長のためです。父の死後は魔法を独学するしかなかったので、まだまだ未熟な自分を指導して頂きたく参りました。勿論呪いは解きたいですが、自ら招いたことですし、仕事より優先させるようなことはありません」

ハーヴェイは本心を伝えた。

「ふむ」

ファビウスは顔を上げると左手の親指と人差し指で顎髭を撫でた。「もしやファビウス殿ほどのお力があれば、この呪いは容易く解けると仰るのですか」

ハーヴェイは期待感を抱いてファビウスを見つめた。ファビウスは持っていた羽ペンを机上のペン挿しに戻すと、両手を組み顎を乗せた。

「呪いというものはそう簡単に解けるものではない。まず原因と背景を読み解いていかねばならぬ。複雑に絡み合う糸を一つ一つ丁寧にほどいていくのと同じことだ。残念ながら今までここに仕える者で、呪いを解いたというのは聞いたことがないな」

「そうですか……」

ハーヴェイは落胆した。

「君は自分の力で日中は元に戻ることに成功した。それは幾つの時かね」

「十八です」

「そうか。では君は採用としよう。早速明日から来なさい」

「えっ、しかし、試験があると伺いましたが……」

「君の実力は呪いの件で証明されている。オーウェンの息子という

ことで身元も確かだ。試験の必要はないと判断した」

「ありがとうございます……！」

ハーヴェイは跪いて頭を垂れた。

「呪いを解く方法が見つかるとういなる。この奥の部屋にある資料は全て閲覧は自由だが、持ち出しは厳禁だ。心しておくように」

「はい」

「ではここに契約書がある。そこに座ってよく読み、同意できたならサインを。記入したら表にいる侍者に渡し、今日はもう下がってよろしい」

「承知致しました」

ハーヴェイは契約書を受け取ると、言われた通り壁際の机に座り一読した。内容は規約を遵守すること、時間外労働に關することなどで特に難しいものではなかった。サインを終えるとファビウスに断って退室した。

侍者は契約書を受け取ると、おめでとうございますと一言添えた。ハーヴェイは笑顔でお礼を言う、また案内の召使いに連れられ、城を出た。

ハーヴェイは呪いを解くための鍵を一つ手に入れたと自身を奮い立たせた。

家ではエクレナの母親がいつものように痛み止めを買いに来たが、それを見送ってしまうと客足が途絶えたので、シーナとエクレナは揃って昼食を摂ることにした。

食卓に着くとシーナは思った。恐らくハーヴェイなら採用されるだろう。名誉あることで飲ばしいが、問題はあの子の性格だ。好奇

心旺盛で少し流されやすい。都会の生活に染まり、あまり家に戻ってこなくなる可能性が否定できない。顔が元に戻ることは望ましいが、もし戻ったなら……。

「お義母様、どうかしました？」

エクレナが無言でいるシーナに尋ねた。

「いや、なんでもないよ。ちょっと考え事しててね」

シーナは慌てて弁明した。

「何かあれば言っておさいね。私にできることなら何でもしますから」

にこやかにエクレナは言う。シーナは思わずエクレナを抱き締めなくなったが、余計な心配をさせるだけなので堪えた。

ハーヴェイは昼過ぎに戻った。ドアを開くと開口一番、結果を報告した。

「やったよ！ 早速明日から通うことになった」

「凄い！ おめでとう！」

ハーヴェイとエクレナは手を取り、喜んでいる。

「おめでとう」

シーナは自分の不安が杞憂に終わり、この二人がいつまでも変わらず慈しみ合うことを願ってやまなかった。

＊

翌日からハーヴェイの助手としての生活が始まった。助手はハーヴェイの他にあと三人雇う予定だと聞いたが、まだ彼等は試験の最中なので研究室には若い魔法使いはハーヴェイ以外いなかった。

研究室はいくつかの部屋に分かれており、まず小さな前室、そこ

を抜けると天井まで本で埋め尽くされた書庫になっていて、その左隣の部屋が会議室、右隣の部屋が実験室という造りだった。

実験室の中心には大きな釜が四つと釜を囲むように二つずつ、計八つの作業台と椅子が配置され、右の壁には魔法に使う様々な材料が陳列された大型の棚が並び、左の壁には見出しに名称を書いた小さな引き出しの並ぶ棚に、数多の薬草が種類別に仕舞われていた。

実験室では何十人も魔法使いが、それぞれ忙しそうに仕事をしていた。ここにいるのは皆、選ばれた者たちなのだ。ハーヴェイは自分もその一員になれたことを誇らしく思った。

ハーヴェイはファビウスに連れられ、一人の男の前に着いた。

「君の直属の上司になるネイハムだ。今後は彼に付いて働いてもらう」

「ネイハムだ。よろしく」

ネイハムは研究室の中では比較的若い方だった。瘦身で理知的な顔立ちをしている。

「ハーヴェイです。よろしくお願いします」

ハーヴェイは差し出されたネイハムの右手に自分の右手を添え、握手を交わした。

「君のことは色々と聞いている。随分優秀みたいだから、期待しているよ」

ネイハムは笑顔だったが、それが言葉通りの意味なのかそれとも皮肉なのか、ハーヴェイには計り兼ねた。

「頑張ります」

暫くは呪いのことは追いやり、仕事に集中しようとハーヴェイは決意した。

ハーヴェイの帰宅はちょうど夕食時だったので、食事をしながら

仕事のことや研究室での話をシーナとエクレナに聞かせるのが習慣になった。

「やっぱり、あそこに集まる魔法使いたちは違うよ。勉強になる」
新たな刺激に胸を膨らませ、仕事に夢中のようにだった。

「それに思った通り、気が遠くなるような数の資料があった。仕事に慣れたら少しずつ読み進めて、呪いを解く方法を探してみる」

「頑張ってるね」

「うん。エクレナは僕の留守中、大丈夫そう？」

「大丈夫よ」

「エクレナに訊いているんじゃないよ。??母さん」

「うん、よくやってくれてるよ」

「そうか。安心した」

エクレナは本当によく働いていた。しかし、シーナはエクレナは独りじゃ何もできない方が本当はよかったように感じていた。

五

シーナの予想通り、三ヶ月も過ぎるとハーヴェイは研究室への泊まり込みを余儀なくされた。

「君は夜中になると変身するんだったよね？」

仕事中、ネイハムは徐にハーヴェイに尋ねた。

「はい。夜明けまでは見苦しい姿でいること、どうかお許しください。見た目は変わりますが、業務に支障を来すようなことはありませんので。ご理解いただければと思います」

「そうか。夜更けが楽しみだなあ」

ネイハムは笑った。

「え？」

「呪いで変身なんて滅多に見られるものじゃないからね。うん、実際に楽しみだ」

「はあ……」

見世物ではないのだが、どうもネイハムは悪意があるのかわからない。

そしてハーヴェイの変身が始まると、研究室の魔法使いたちは持ち場を離れてまで、入れ替わり立ち替わりでハーヴェイを見学しにやって来た。

「おお、これが……」

「実に興味深い……！」

ハーヴェイの周りには人集りができた。中には素晴らしいとまで言う者もいた。ネイハムだった。

「ハーヴェイ、凄いな君は！」

ネイハムは何故か握手してきた。

「はあ……」

長年苦しんできたというのに、何故か羨ましそうな顔で見つめる
ネイハムにハーヴェイは苦笑いするしかなかった。

研究者というのは、どこか一般人と違う考え方でないと務まらないものなのかもしれない。

そう自分を納得させようとする間にも、ネイハムは笑いながらハーヴェイの顔をべたべたと触っている。忙しいから泊まり込むのに、仕事が中断されているのは大丈夫なのか。とは、さすがに言えなかったが。

「今やっている研究が済んだら、ちょっと調べてみようか」

一通り触って満ちたネイハムは、上機嫌でそう言った。

「それは是非！ お願いします」

ハーヴェイは、ここにいる能力者たちが呪いを解いてくれるなら、暫く好奇の対象でも構わないと思った。

そして夜明けを迎えたことを確認したハーヴェイは、いつものように魔法をかけて元の姿に戻った。するとネイハムはハーヴェイをじっと見つめ、

「変身前と後の変わりようは、天と地ほどあるな」

と、呟いた。ハーヴェイが苦笑して、

「散々女性に逃げられました」

と、言うと、ネイハムは大きな声で笑い出した。

「そうか、そうか。あの顔では当然だろうな。いや、済まん。色男が女に逃げられるというのは、どんな時でもやはり爽快なものだな」
謝っておきながら、より失礼な発言をしている。ハーヴェイは哑然とした。エクレナと出会う前だったら恐らく腹を立てていただろう。ハーヴェイは胸に手を当て、ひっそりとエクレナに感謝した。

しかし、ネイハムの顔を見るとあっけらかんとしていて悪気はなさそうだった。この男はどうも掴みにくい。

「ハーヴェイ、そろそろ終業だ。今日の結果をまとめておいてくれ」
ネイハムはハーヴェイに呼びかけた。

笑っていたかと思えばいつの間にか作業台の方に移動し、紙の束を積み上げている。夜通し行った調査や実験の記録を研究者が各々記したものが、ただ乱雑に置かれた状態だった。ネイハムの班の分だけでもかなりの量がある。

「はい。いつまでにでしょうか」

「今日の結果なんだから決まっているだろう。明日の仕事が始まる前だ」

「分かりました」

実験道具の後始末と掃除は終業後の助手の役目だ。その後には手をつけるから、休んでいる暇はないな……とは思ったが、ハーヴェイは早く研究室の一員として認められたい一心で黙々と作業に徹した。幸い彼は引き籠って呪いを研究していただけあって、根詰めの作業はそれほど苦ではなかった。助手なので殆どの仕事が雑用だったが、ハーヴェイは毎日充実していた。

＊

そんなある日、仕事が一段落するとネイハムはハーヴェイに声をかけた。

「ハーヴェイ。君の呪いについてなんだが」

「はい」

「背景について聞きたいんだが、禁忌の魔法は人の命や未来を大きく左右するものに限られる。君は一体何をしようとしたんだ？」

ハーヴェイはネイハムの眼から視線を少し下にずらした。人は己の愚行に触れる時、躊躇いを覚えるのか無意識に眼を逸らしてしまうものだ。

「早くに亡くしてしまった父を呼び醒ますことができないかと思い、手を出しました」

「……浅はかだな」

「仰る通りです。僕はまだ子供で、何故禁じられているかなんて考えもしませんでした。本を見つけた時は寧ろ、そんな魔法があるのなら使わないのはおかしい。それくらいの気持ちでした。父が戻れば母も歡ぶと思ったんです」

「……」

「しかし、結果は……却って母を悲しませることとなりました」
やや自嘲気味に言った後でハーヴェイは、はたと顔を上げた。また皮肉の類いを言われるかと思ったが、意外にもネイハムは黙ってメモを執っていた。

「なるほど。では今度はその魔法の工程について聞こうか」

ネイハムが思いのほか真面目な表情だったので、ハーヴェイは一瞬返答が遅れた。

「確か……」

その魔法の本はすぐシーナに処分されてしまったので、やり方などはもう明確に覚えていなかった。ハーヴェイは身振り手振りを交えながら記憶を辿り、なんとか最後まで説明した。

「ふむ。材料については少し曖昧なんだな。まあいい。子供がやるくらいだ。複雑なものなどないだろう」

ネイハムはメモを終えると、手帳を閉じた。

「参考になりそうな文献をいくつか探し出しておく。ここの蔵書を片っ端から一冊ずつ読んでいたんじゃ、何年かかるか分からんかな」

ネイハムはハーヴェイが毎日終業後に書庫に籠っているのを知っていたようだ。

「あ、ありがとうございます！」

ハーヴェイは心から感謝した。

それから三日後、ネイハムは帰る間際にハーヴェイに一片の紙切れを渡した。

「書庫に入ってそこに書いてある呪文を唱えれば、本の方から勝手に降りてくる。それを読めば何か手掛かりが掴めるかもしれん。まあ、保証はないがな」

「お心遣い、感謝します！」

ハーヴェイは紙片をありがたく頂戴すると、早速書庫へ赴き呪文を唱えた。

すると天井まである書架から次々と本が舞い降りてきた。僅か十数秒の内に閲覧用テーブルの上には分厚い本ばかり三十冊程が積み上げられた。

「よし」

ハーヴェイはそう言って気合を入れると、席に着いて本を読み始めた。

そうしてハーヴェイは夕食時に帰宅することが難しくなり、毎日夜遅く帰るようになった。帰宅後はすぐに休んでしまう上に休みの日まで書庫へ通っていたので、家族とは殆どすれ違いの生活になった。

シーナは不安に思ったが、エクレナは懸命なハーヴェイを温かく支えた。

そして半月ほど経つと「明日からは暫く帰れない」とハーヴェイから宣言があった。

翌日から泊まり込みの作業が連続して四日に及んだ。新しい魔法の開発に着手したためである。

開発には多大な時間と労力がかかる。実験を繰り返し、成果を確認しなければならぬからだ。ハーヴェイの父もかつて歩んだ道だった。

五日目の朝方帰宅したハーヴェイは、何故か疲れた様子は見せず、寧ろ興奮しているようだった。

「???もうすぐ、呪いが解けるかもしれない」

ハーヴェイは武者震いが起きそうなのを必死で押さえ込んで言った。

「え!」

シーナとエクレナが同時に声をあげた。

「今日はとりあえず休むよ。明日からまた、頑張らないといけないから」

疲れた様子は見せなかったが、やはり疲れていたのだろう。ハーヴェイは翌朝まで丸一日眠り続けた。

それから帰ったり帰らなかったりの日が続き、ハーヴェイはあれ以来、特に呪いの話はせずに日々が過ぎ去った。

シーナとエクレナが呪いの話を忘れかけた頃、その日はやってきた。

「今夜二人に確認して欲しいんだ。呪いが解けたかどうか」

夕食時に帰宅したハーヴェイは、帰るなり息を切らしてそう言った。

ついに来た。

シーナもエクレナも思わず構えた。呪いにかかってから十余り、いよいよハーヴェイの呪縛が解ける時が来たのかと。

＊

時計の針が深夜零時を差す頃、ハーヴェイの変身が始まる。三人は居間で一緒に過ごすことにした。

「色々調べた結果、呪いを解くのは第三者ではできないことが分かったんだ。自分自身で打ち勝つことが大事なんだと思う」

城の研究室にはハーヴェイよりも優秀な魔法使いが集まっている。彼等を以てしても、呪いを解くに至らなかった。しかし、ハーヴェイはネイハムの協力で得られた文献を参考に、ついに核心まで辿り着いたのだった。

「必要な材料は結局、全て僕自身にあった。少しの血液と髪の毛と、苦痛に耐え得る肉体と精神」

「苦痛……」

エクレナはハーヴェイが城で何を行ったのか心配になった。

「大丈夫だよ。済んだからここにいるんだ」

ハーヴェイはエクレナの手を握り、不安にさせないため具体的には語らなかった。

夜更けが近づく。

シーナとハーヴェイは何度も時計を眺めた。エクレナは時計の針の音が、厭に大きく感じた。皆口数が少なかった。

十一時三十分……、四十五分……、五十五分……。

刻々と時間が迫って来る。シーナは固唾を吞んで見守った。ハーヴェイはソファに腰掛け、隣に座っているエクレナの手を握っていた。エクレナは鼓動が速くなるのを感じた。

零時を廻った。

「……」

皆押し黙った。

無言のまま五分が過ぎた。エクレナはハーヴェイの歓喜の声をひたすら待っていた。

更に五分が過ぎた。

シーナが最初に口を開いた。

「もう、大丈夫なんじゃないかい……」

それを聞き、エクレナもハーヴェイの手を握り直して問う。

「ハーヴェイ……?」

ハーヴェイは空いている左手で自分の頬に触れた。

「……うん、成功だ」

「本当に!？」

エクレナがハーヴェイの頬に触れる。両手で何度も感触を確かめると、エクレナはハーヴェイに抱きついて泣き出した。

「よかった。ハーヴェイ、よかった……!」

ハーヴェイはほっとしたように微笑し、エクレナの髪を撫でて宥

めた。シーナは緊張の糸が切れたように脱力し、床に座り込んだ。
ハーヴェイが長年の苦しみから解放された瞬間だった。

＊

それからハーヴェイは水を得た魚のように、積極的に外に出て他人と交流を持つようになった。

今までは仕事場に直行し、終わればまっすぐ自宅に戻り城下町で過ごすことなどなかったが、盛り場で酒を飲むようになった。もう彼は夜更けを恐れ、深夜に自室に籠る必要はないのだ。

ハーヴェイの美しさは城下町に忽ち広まり、噂を聞きつけた人々が色んな町から集まるようになった。酒場でハーヴェイは様々な人と飲んだ。言うまでもなくその殆どが女で、毎晩のように口説かれていた。

「私もご一緒していいかしら」

「君の肌は、雪のように白いね。何処の町から来たの？」

「ふふふ、この肌は自慢なの。ここからずっと北のフィノルデンから来たんだけど、ご存じかしら。冬は雪が深く積もってキラキラと光って、夜でも明るくて綺麗なのよ。よかったら今度一緒にどうかしら？」

「家族を置いてそんなに遠くへは行けないかな」

「所持持ちなの？ 意外ね。でもたまにはいいじゃない」

「それなら比較的近い私の町に来ればいいわ。フランドイスは地酒が有名なのよ。たくさん種類のがあって、きつとびっくりするわ」

「へえ、いいね。もっと町の話聞かせてよ」

「なによ、私のところなんてね？？」

そんな会話ばかり繰り返されていた。

シーナは懸念していた通りになって不安にかられたが、ハーヴェイとエクレナの間には特に変わったことはなかった。

毎晩飲んで帰ってきて、やっと解放されたのだ、今まで避けていた人付き合いをするようになったのはよいことだとエクレナは寛大に思っていた。

しかし、ハーヴェイはその内に仕事のない日も家を空けるようになった。

やはり帰りは遅く、酒を飲んで戻る。時には朝まで帰らなかった。

すれ違いの生活。しかも理由は仕事ではない。

見兼ねたシーナはハーヴェイを咎めた。

「お前、最近遊びが過ぎるんじゃないかい」

「嫌だな、母さん。遊び回っているわけじゃないよ」

「何言ってるんだ、毎晩飲んで帰ってきて。呪いが解けた途端、眼の見えないエクレナを置き去りにするなんて可哀想じゃないか」

「見えなくても、うちのことはもう分かるし??」

「私は気持ちの話をしているんだよ!」

シーナは声を荒げた。ハーヴェイは驚いたように眼を見開いてシーナを見つめたが、すぐに元の調子に戻って言った。

「まあ、僕も早いに越したことはないと思っっているよ」

謝罪でも弁解でもなく、要領を得ない返答にシーナはもう一度詰問しようとした。

「ハーヴェイ、お前ね??」

そこに席を外していたエクレナが戻ったので、シーナは話を止めた。急に静かになったのでエクレナは首をかしげた。

「何でもないよ、エクレナ。部屋へ行こう」

ハーヴェイはエクレナの肩を抱いて居間を出た。ドアが閉まると、

シーナは齒痒そうに拳を握り、テーブルを強く一度叩いた。

「エクレナ、こここのところ僕はあまり家にいないけど、分かって欲しいんだ。今、知りたいことがたくさんある。色んな人と色んな話をして、全部吸収したいと思っている。必要なことなんだ」

寝室に入るとハーヴェイはエクレナの肩を両手で掴んで、そう言った。

「充実しているのね。私なら大丈夫よ」

エクレナは微笑みを浮かべた。

「よかった」

ハーヴェイは、ほっとしたようにエクレナの肩から手を離すと、ベッドに腰掛けた。

エクレナはハーヴェイに背を向けるように窓辺に近寄り、微笑の裏の気持ちを悟られないよう努めた。

寂しくないと言えば嘘になる。しかし、寂しいと言えればハーヴェイは困るだろう。眼が見えない分、負担にはなりたくない。それに暫く経てば落ち着いて、また早く帰ってくるようになるはずだ。エクレナはそう思っていた。

六

よく晴れたある日、店番をエクレナに任せシーナが買い物に出ようとすると、ブラシや本や工房にある薬など、様々なものが宙を舞い二階へ向かっていた。

不思議に思いながらシーナが後を追うと、全てハーヴェイの寝室に吸い込まれていた。ドアが開け放たれた部屋を覗くと、ハーヴェイが大きな鞆に魔法で色々な物を詰めていた。

「ハーヴェイ、一体何をしてるんだい？」

シーナが背を向けているハーヴェイに尋ねると、ハーヴェイは振り向かずに応えた。

「異国に出るよ」

「な、何？ ……異国!？」

予想だになかった返答に、シーナは吃音した。

「エクレナの眼が見えるようになる魔法を探すんだ」

「エクレナの、眼を……？」

「そう。もう研究室の上役の許可は取ってある。数ヶ月、いや、もしかすると一年くらいは帰って来れないかもしれない」

「ちょっとお待ち！ 何だって急に！ エクレナは知っているのかい!？」

「いや、言っていない。言えば負担に思っ、見えないままで構わないって言うだろうから」

「そうさ、見えないままでも上手く暮らして来たんだ。これからだってそれでいいじゃないか！」

「よくないよ」

今まで荷物を見ていて一度も視線を合わせなかったハーヴェイが手を止め、鋭い目つきでシーナを正視した。シーナは一瞬たじろいだ。

「僕は呪いが解けて世界が変わった。だからエクレナの世界も変えてあげたいんだ」

「そんなことを言ってお前、眼が見えるようになる確証でもあるのかい!？」

シーナは失明した者が視力を取り戻すなど、不可能だと思っていた。

ハーヴェイはシーナから視線を外すと、荷造りを再開した。

「失明した人の視力を元に戻した話を城下町の酒場で聞いてね。それが海を越えたベルデヒッツのことだと掴むまで、随分町を渡り歩いたよ。向こうはここよりずっと魔法が盛んで、技術も発達しているらしい。ただ、噂話の域を出ていないんだ。視力が戻った人物の名前も、治した魔法使いの所在も分からない」

「そんなんじゃ、お前……」

「例えその話が虚報だったとしても、魔法が栄えた国だ。行けばきっと手掛かりはある。僕は必ず方法を見つけて帰るよ」

鞆が閉じられた。外套が宙を舞い、ハーヴェイの手に収まった。

「留守を頼むよ、母さん。なるべく早く帰ってくる」

「お待ち! ハーヴェイ!」

つむじ風が起きた。シーナは咄嗟に顔を伏せた。部屋のカーテンやベッドのシャツが激しく舞い踊り、家具が揺れる。

風が止み、シーナが顔を上げた時には、もうそこにハーヴェイの姿はなかった。開いた窓から馬が駆けていく音が聞こえる。

「ああ、ハーヴェイ、なんてことを……!」

シーナはその場に両膝をついて打ち拉がれた。

エクレナは接客中だったが、馬の走る音でハーヴェイが出掛けたことに気が付いた。また帰りは遅くなるのかしら、と軽く考えてい

たが、夕食の席でシーナからハーヴェイは仕事の都合で異国に行くことになったと聞かされて、動揺した。

「そうなんですか……。でも、私に何も言わずに行くなんて……」

「きゅ、急に決まったみたいでね。あんたは接客中だったし、ゆっくりしていられなかったんだよ。申し訳ないって伝えてくれって」

「そうですか……。それで、いつ帰って来るんでしょうか」

「それは……仕事の成果次第だと言っていた。だから早ければ三ヶ月かそこらで帰れるんじゃないかい」

「そうですか。ハーヴェイならきつと早いですね」

エクレナは希望を持って微笑んだ。

シーナは心苦しかったが、真実を言うのは酷に感じて、つい嘘を吐いた。嘘のままでもハーヴェイが早く帰りさえすれば済む。そう思った。

＊

次の日からエクレナは益々よく働いた。

動いている方が色々と考えなくて済む。ハーヴェイがいない日が暫く続くことを考えると寂しさに押し潰されそうになるので、それを避けるためにも毎日身体をくたくたにして、ベッドに入ったらすぐに眠りにつけるようにしたのだった。

しかし、身体は以前より動かしているのに、食事の方はあまり進まず気分が優れなかった。シーナは心配したが、エクレナは大丈夫だと答え、休むことなく身体を動かした。

数日して、エクレナは気分が悪くなって嘔吐した。すぐに回復したが、翌日もまた同じ症状が出た。シーナは早々と店を閉めてエクレナをベッドで休ませた。

「すみません、お義母様。もう大丈夫ですから」

ベッドから起き上がろうとして止められた。

「お待ち、エクレナ。もしかしてお前、妊娠しているんじゃないのかい？」

「え……」

シーナの指摘通り、確かにエクレナのお腹には、小さな命が宿っていた。

エクレナは最初は戸惑ったものの、すぐに気を取り直した。

「子供ができた。私とハーヴェイの子だ。なんて素晴らしいのだろう。」

自分の中に命が宿するというのは神秘的であり、哲学的でもあった。今はハーヴェイがいらないが、生まれる頃にはきっと戻っているはずだ。それまでは寂しくとも頑張ろうとエクレナは決意した。

シーナは初孫の誕生は心底嬉しかったが、息子の不在が口惜しかった。知れば今頃泣いて飲んだかもしれない。そして毎日真っ直ぐ帰宅して、エクレナのお腹に話し掛けたかもしれない。異国に出ようとは微塵も思わないはずだ。

しかし、今更悔やんでもどうにもならない。一時は孫どころか結婚すら叶わないかと思われた息子に、希望と安らぎをもたらしたエクレナだ。何としてでも無事出産させたい。

「安心おし、エクレナ。ハーヴェイがいなくても私がついてる。元気な赤ちゃんを生めるよう、何だってするからね」

「ありがとうございます。お義母様」

シーナは毎日身体によいというスープを作ってくれたが、何が入っているのかよく分からない味がした。しかし、飲むと様々な不安が消えていく感じがする。きっと魔法のスープなのだろう。そう思いながらエクレナは有り難く飲み干した。

*

それから三ヶ月が過ぎた。ハーヴェイからは手紙の一通も来なかった。

何処に住み、どんな暮らしをしているのか。また慣れない地で怪我や病気はしていないか心配だったが、一切が不明だった。

居場所が分からなければ魔法を以てしても、こちらの様子を知らせる手立てはなかったので、エクレナの妊娠を告げることも叶わなかった。

＊

六ヶ月が過ぎた。エクレナのお腹は大きく張りだし、母子共に順調だった。すでに二児の母である彼女の妹がくれた、妊婦用の服がちょうどよいサイズになっていた。

エクレナの父母や弟妹たち家族が時折訪ねてきてくれて、いい気分転換になった。エクレナは妊娠や育児について色々教わり、毎日が過ぎていったが、ハーヴェイはまだ戻る気配がなかった。

身重のエクレナは身体に影響がないよう心配する心に蓋をして、ただただ子供のことを考えるようにした。

＊

いよいよ臨月を迎え、いつ生まれてもおかしくないという時が来た。就寝は常にシーナと共にし、出産に備えた。

その晩エクレナは妊娠から来る腰の痛みが酷かったので、シーナが擦ってくれていた。

「もう、名前は考えたのかい？」

「ええ、男の子ならアルヴィン、女の子ならミュリエルと」

「そうかい。どっちだろうねえ」

「ハーヴェイなら、なんて付けたかしら……」

エクレナは寂しそうに呟いた。

「……」

シーナは思わず手が止まった。

「あつ、ありがとうございます。大分楽になりました。もう休みます。おやすみなさい」

エクレナは慌ててそう言い、姿勢を変えると瞼を閉じた。

その翌日の昼に、山あいの家には大きな産声が二回響いた。

エクレナは元気な男女の双子を生んだ。

「エクレナ、男の子と女の子の双子だよ。いっぺんに二人もなんて、これから子育てが大変だ」

そう言ってシーナは目尻を下げ、男の子を抱き上げた。

「私もちよくちよく手伝いに来るからね」

エクレナの母親が女の子を抱いて言った。

明け方破水したエクレナの様子を見て、シーナが魔法で鳥を使いに出し、エクレナの母に伝書をしたのだった。

「あの……私にも……」

赤ちゃんを抱かせて欲しいと手を伸ばした。

「ああ、ごめんよ」

二人はエクレナの手を取り、赤ん坊を抱かせた。

両腕に伝わるずっしりと温かい二つの命は、何ものにも代え難く感じた。

アルヴィンとミュリエル。眼が見えなくてもこの子たちを立派に育てよう。エクレナは 固く誓った。

しかし、この場にはハーヴェイがいらない。

ハーヴェイはこの子たちの誕生を知らない。そのことだけは、彼女の心に暗い陰を落とした。

*

エクレナは眼が見えなくとも感覚を研ぎ澄まし、常に子供に触れ、耳を澄まして懸命に子育てをした。シーナも色々と手助け、子供たちは順調に育っていった。

初めての子育てに奮闘するエクレナは忙しく毎日を過ごし、瞬く間に一年が過ぎた。だがハーヴェイは未だ帰らなかった。彼の香水の匂いのしたベッドは、もう殆ど香ってはいなかった。

「ハーヴェイは、まだ帰れないんですかね……」

ある晩、子供たちを寝かしつけながらエクレナが呟いた。

「エクレナ……済まないね。やっぱり私があの時、無理にでも止めておけば……」

「いえ、仕事なら仕方がないんですけど、手紙くらいくれてもいいのに……」

「？？本当は仕事ではないんだ。」

シーナはそう言おうと思ったが、言えなかった。

便りすらないところを考えると、息子は異国に魅せられて、もう帰ってこないのではないかという不安がよぎったのだった。

せめてもう少し早く妊娠が分かっていたら……。シーナは後悔と疑心に苛まれた。

シーナはエクレナにいつ真実を告げるべきか、計り兼ねた。胸が詰まる思いだったが、可愛い孫たちの寝顔だけが救いだった。

＊

そしてエクレナの子供たちは、父親の顔を知らぬまま四つになろうとしていた。

「どうしてうちには おとうさん 父様がいないの？」
そんなことを口にするようになった。

「父様はお仕事で遠いところへ行っているの。済んだら戻ってくるのよ」

エクレナはそう説明した。しかし、いつ戻ってくるのか訊かれても答えることができずに困窮した。

エクレナの眼が見えないことについては、子供たちは自然と理解をしていった。シーナに進んで かあさま 母様の手伝いをしなさいと口煩く言われるので、ある日子供たちはどうしてかと問うと、答えの代わりに眼をつぶって歩いてみなさいと言われ、二人は見えないことがどういふことなのかを体感し、母を敬い気遣う子に育っていった。

子供に手がかからなくなってくると、一日が長い。長いと物思いに耽る時間ができてしまう。エクレナはそんなことを思いながら窓辺に佇んだ。

?? ハーヴェイはいつ帰ってくるのだろう。

窓から差し込む月光が彼女の頬を照らした。夜の帳が降りるとエクレナは、ハーヴェイの顔が変化していた頃のことを思い出す。

あの頃のハーヴェイはまだ憂いを抱えていた。私と一緒に暮らすようになっても夜になればベッドは別々で、朝になるまで抱き締めてはくれなかった。それが呪いが解けたら、いつも私を抱き締めて眠るようになった。

嬉しかった。私は彼にとって必要な存在なのだと思うと、全てを受け入れてあげたいと思った。

だから彼が羽根を広げて外の世界へ飛び立とうとも、最後には私を抱き締めて眠りにつくのなら、何も言うことはなかった。でもい

つの間にかハーヴェイは、外の世界の方が大事になってしまったのだ。

新しい世界？。今まで抑圧されていた分、新鮮だったに違いない。もしも私の眼が見えるようになったら、同じように魅せられるかもしれない。彼を責められはしない。

それにハーヴェイは美形なのだ。美しい男性には、美しい女性が似合う。何処に行っても彼は目立つだろう。店番をしていると、いつもハーヴェイの所在を尋ねられた。彼が店に顔を出すと、いつも女性に囲まれた。そんな人を周りが放っておくはずがない。

私は見えないからお洒落もできないし、何より元々の顔が地味だ。ハーヴェイが選んでくれたのは、私が逃げ出さなかったから、ただそれだけの理由なのではないか。私が眼の見える普通の女だったら、彼は見向きもしなかったろう。いや、それ以前に出会うことすらなかったかもしれない。

後ろ向きに考え出すと、止まらなかった。

……もう、私の役目は終わったのかもしれない。
そう思うと涙が溢れ、頬を伝った。

盲目の私は結婚できただけでも幸運だったのに、いつの間にかそれが当たり前だと思いがついていたのかもしれない。

……いや、違う。感情を殺しすぎた。もっと寂しいと言えばよかったのかもしれない。彼を放って置き過ぎた。きつとつまらない女だと愛想を尽かしたのだ。もっと彼に甘えればよかった。こんなに早く別れの時が来るなんて……！

涙はどんどん溢れ出し、手で拭っても拭っても消えてはくれなかった。一度堰を切った大粒の涙は、留まることを知らなかった。月明かりがエクレナの涙を寂しく光らせた。

「エクレナ、どうかしたのかい？」

突然シーナの声がしたので、エクレナは驚いて身体を強張らせた。ドアの開く音がしなかった。どうやらきちんと閉まっていなかったようだ。

「い、いえ、なんでもありません……」

急いでエプロンで涙を拭いて誤魔化した。灯りは点けていないので、もしかしたら涙に気付かれていないかもしれない。エクレナは仄かな期待を持った。

「アルヴィンとミュリエルが、母様が泣いていると心配して私を呼びに来たよ」

エクレナの思いは打ち砕かれた。まさか子供たちが見ていたなんて。

アルヴィンとミュリエルはシーナのスカートに掴まって、エクレナを心配そうに見ている。

「母様、何処か痛いのか？」

アルヴィンが尋ねた。

「母様、お腹痛い？」

ミュリエルが続いた。

「ああ、二人とも……ごめんね。母様は大丈夫。大丈夫よ」

エクレナがドアの方に駆け寄ると二人も駆け出し、母の足許にしがみついた。

いけない、子供たちを不安にさせるなんて。エクレナは強く反省した。

エクレナが泣いているのを初めて見たシーナは、胸が痛んだ。彼

女は嫁いできて一度も泣いたことはなかったのだ。理由は息子のこ
としかあるまい。シーナは重い口を開いた。

「……エクレナ、私はお前に謝らなければならない」

「え？」

「ずっと、嘘を吐いていた」

「嘘、ですか……」

アルヴィンとミュリエルもシーナを見上げる。

「ハーヴェイは仕事で異国に行ったというのは、あれは嘘なんだ。
本当はエクレナ、お前の眼が見えるようになる魔法を探しに行った
んだよ」

「え……」

「いつ帰るか分からないと言うから、自分のためと知ればお前は自
分を責めるんじゃないかと思ってね。ハーヴェイもそう思ったから、
何も言わずに旅立ったのさ。私はあの子がすぐに戻りさえすれば済
むと思ったんだけど、甘かった。まさか音信不通のまま四年も戻
らないとは……。お前を深く悲しませることになってしまったこと、
許しておくれ」

シーナは右手で顔を覆って俯いた。

「そう……だったんですか……」

エクレナは目尻に残っていた涙が乾いていくのを感じた。

ハーヴェイは私のことを思っただけで出国した……。確かにその理由で
異国に行くなどと言われたら、反対した。見えなくとも、もう充分
な暮らしをしているのだから。

「見えなくなった人の視力を元に戻した話を耳にしたと言ってね、
もっと情報はないかと色んな町の盛り場に通ったから、あの子は留
守がちになっていたんだ」

分かって欲しい。いつかハーヴェイはそう言っていた。

「でも、もし……。もしも、あの子が目的を忘れて二度と帰って来なかったとしても、許してやって欲しい。あの子は昔から好奇心に身を任せ過ぎるきらいがある。異国に魅せられてしまっただけで戻らないということも、あるかもしれない……」

音信不通で四年？。忘れられたと思うには充分な期間ではある。

「でも確かに言ったんだ。エクレナは自分に新しい世界をくれた、だから今度は自分の番なんだと。お前を思って旅立った。それに偽りはない」

「……」

私はまだ、彼にとって必要な存在なのだろうか。エクレナは一縷の望みを感じた。

「母様のおめめが見えるようになるの？」

「父様が帰ったら、見えるの？」

アルヴィンとミユリエルが口を挟んだ。子供なりに二人は話を理解していたようだ。

「そう、父様は母様のために頑張っているの。だから待ちましょう。今に帰ってくるわ。そして帰ったら母様の眼はきつと見えるようになるわ」

子供たちに聞かせているが、エクレナは自身にも言い聞かせるように言った。

「母様は大丈夫。もう泣いたりしないわ。心配かけてごめんね」

エクレナは跪き、子供たちを強く抱き締めた。

「済まない、本当に済まないね」

シーナも膝を折り、三人を抱き締めた。

エクレナはこの日誓った。

??待とう。私が信じて待たなければ、ハーヴェイは何のために旅立ったのか分からない。きっとあの人は帰る。新たな魔法を手に入れて。

七

エクレナが真実を知ってひと月ほど経った頃、酷く風の強い晩が訪れた。

風は山の樹木をうねり、鳴かせ、家の窓はガタガタと揺れ、隙間からヒューヒューと奇妙な声を出した。

雨は降っていないようだけど、これから荒れて嵐になるのかしら……。エクレナはなんだか胸がざわめいた。

「母様、すごい音がする……」

「お家が揺れてるの」

子供たちは不安げにエクレナの足許にしがみついた。

「大丈夫よ。怖いのなら母様がご本を読んであげる」

エクレナは二人の頭を撫でた。

「それじゃ、今日は早目に休むといいよ」

シーナが居間で三人を見送った。

「そうします。ほら、お祖母様ばあさまにおやすみなさいは？」

「おやすみなさい」

「お祖母様、おやすみなさい」

「はい、おやすみ」

寝室に入り、子供たちを着替えさせた後、本を選ばせる。ここにある本は全てシーナが魔法をかけて、指でなぞればエクレナにも文字が分かるようになっていた。

「母様、これ」

アルヴィンが本を差し出す。受け取ったエクレナは子供たちをベッドに促した。

二人はいそいそとベッドに入り、横になった。動きが収まるとエクレナは子供たちの襟元のカバーを正した。

「ガタガタ怖い」

「ヒューヒュー怖い」

そう言いつつも子供たちは、いつもと違う夜に段々わくわくしている風でもあった。

エクレナは二人の頭を撫でた後、椅子に座った。ページを開いて指でなぞる。もう何度も読んでいたので、最初が分かれば、何の話か大体暗記できている。

「昔々、あるところに……」

ゆっくりと読み始めると、子供たちは風の音は気にならなくなってきたようだ。

読み終わる前に寝息が二つ聞こえてきた。

エクレナは静かに本を棚に戻すと、部屋を出た。まだ眠れそうにないので居間に戻って子供たちの繕い物をすることにした。母となつたエクレナは、余程複雑なものでない限り料理も裁縫も魔法の力を借りずとも、こなせるようになっていた。

居間に入ると、シーナも寝室に行ってしまったようで風の音以外はしんとしていた。

裁縫箱を取り出したその時、外で何か音がしたような気がした。耳を澄ましたが、聞こえるのは強い風の音だけだった。

気のせいかとソファに腰掛けると、今度はしっかりと音を捉えた。ドアをノックする音だった。

エクレナは、はっとしてドアの方を向いた。するとまた音が聞こえた。気のせいではなかった。エクレナは胸騒ぎが再び沸き起こるのを感じた。

立ち上がり、引き寄せられるように小走りで戸口に向かうと、ド

アの向こうから風に紛れて声が聞こえた。

「……ナ」

間違いない。

エクレナは急いでドアを開けた。

その瞬間、強風が入り込み、エクレナは風圧で倒れそうになった。

「大丈夫かい？」

ふわりと身体が浮くような感覚に陥った。声の主に咄嗟に抱きかえられたのだった。

エクレナは問いに返事をしなかった。いやでなかったのだ。声の主は左腕でエクレナを支えたまま右手でドアを閉めると、溜め息を一つ吐いた。

「今夜は酷い風だね。うちはもう古いから、風が止んだら建て付けを点検した方がいいかもしれないな」

そう言って強風でくしゃくしゃになったエクレナの髪を、空いている右手で整えた。覚えのある香りがした。

「ハ……」

エクレナは震えて上手く声が出せずにいた。代わりに涙が溢れてきた。

「長い間待たせて済まなかったね。ただいま、エクレナ」

そう言って微笑した彼は、エクレナの涙がこぼれる前に人差し指で優しく拭った。

「ハーヴェイ……お帰りなさい……！」

やっと声が出せたエクレナは、懐かしい声の主に思い切り抱きついた。

「風が凄いから一晩明かしてからにしようかとも思ったんだけど、

やっぱり早く帰りたくて」

居間に移動して床に荷物を置いたが、エクレナはぐずぐずと泣いたままハーヴェイにすっかりとしがみついて、離れなかった。

「困ったな。そんなに泣くなんて」

ハーヴェイは苦笑しながらエクレナの頭を撫でた。

「とりあえず、ソファに座ろうか」

ハーヴェイはエクレナの腰に手を回し、二人同時に腰掛けた。

「ほら、いつまでも俯いて泣いていないで、顔を見せておくれ」

ハーヴェイが短い呪文を唱え、鞆が開き中からハンカチーフが飛び出して宙を舞い彼の手に収まった。そして丁寧にエクレナの涙を拭いた。すると魔法のせいなのか、ぴたりと涙と鳴咽が治まった。

「……泣いたから、きっと酷い顔をしているわ」

エクレナは躊躇って下を向いたが、ハーヴェイがそれを阻止した。「酷くなんかないよ。四年も愛する妻に会えなかったんだ。よく見せて」

ハーヴェイはエクレナの顎に手を添えて、上に向けた。

ああ、私も愛する夫の顔が見れたなら、どんなにいいだろう……。エクレナがそう思うと同時に唇を塞がれた。

お互いを感じあった後、ハーヴェイは小さく、しかし、力強く、

「大丈夫、見えるよ」

と呟いた。

「え？」

エクレナは一瞬、魔法で心が読まれたのかと思ったが、ハーヴェイが家を留守にした本当の理由を思い出した。

「今から君の視力を元に戻す」

瞳に強い意志を宿らせ、ハーヴェイはエクレナの肩を掴んだ。

「エクレナは普段暗闇ではなく、ぼんやりと明暗を感じられるんだよね。でもやっぱり夜の方がいい。いきなり強い光は眼によくない。暗い内に戻して、慣らそう」

そうは言われてもエクレナは信じられなかった。本当に見えるようになるのだろうか。

硬い表情のエクレナを見てハーヴェイは言った。

「あ、信じていないね？ 何故こんなに長い間帰って来れなかったと思っているのさ。研究に次ぐ研究を重ねたのと、何と言っても実験をする機会が訪れなかったからさ。失明した人はそう多くなくてね。でも確実に成功させなきゃ意味がない。それに？？」

肩を掴む力が緩んだ。

「僕を誰だと思っているのさ。ハーヴェイⅡラドウィックと言えばもう、海の向こうじゃ有名人だよ」

ハーヴェイはいたずらっぽく微笑んだ。エクレナもハーヴェイと再会してから初めて笑った。

「やっと笑ってくれたね。その笑顔が見たかったんだ」
優しい言葉にエクレナは再び涙が出そうになったが、懸命に堪えた。

ハーヴェイは心変わりしなかった。私が一度猜疑心に囚われた時も、彼は熱心に研究をしていたのかと思うと、申し訳なくて胸が潰れそうになる。

ごめんなさい、ハーヴェイ。万が一、魔法が失敗して見えないままだとしても、もう何処にも行かずにずっとそばにいてくれさえすれば、私はこの先永遠に見えなくとも構わない。

でも、そんなことを言ったらハーヴェイは悲しむに違いないと、エクレナは心の中で言うに止めた。

「それじゃ準備があるから、工房に移ろう」

工房に入ると、ハーヴェイはエクレナを椅子に座らせた。

広い空間を作るためにその他のテーブルと椅子は移動させ、持ってきた鞆からたくさんの小瓶や袋を取り出し、ひとつひとつテーブルに並べた。

「海の向こうのベルデヒッツでは魔法が盛んでね、ここにはない材料が色々あるんだ」

ハーヴェイは火を熾して湯を沸かし、材料を次々に投入した。グツグツと煮えていく音が部屋に響く。

「ハーヴェイ、私はあなたの向こうでの暮らしを何も知らない。聞きたいことがたくさんあるの。こちらの生活だってハーヴェイが旅立ってから??」

「まあ、待って。まずは君への魔法をかけてからだよ」

今度は手帳を片手に床に魔法陣を描き始めた。ちょうど両腕を広げたくらいの大きさの円だった。

「よし、準備完了だ。始めよう」

「ねえ、その魔法は危険だったりしないの?」

「さっき言ったじゃないか。大丈夫だよ」

「私がじゃなくて、ハーヴェイがまた呪われたりとか……」

「これは禁忌の魔法じゃないよ」

ハーヴェイは苦笑した。

「それならよかった」

「じゃあ、こっちに来て」

ハーヴェイがエクレナの手を引いて魔法陣の中心に位置させた。

「ここで膝を着いて、両手も前で床に着けて伏せるようにして。衝撃が来ても大丈夫のように、しっかり脚も広げてから眼を閉じて」

「衝撃!??」

「そう、爆風が起きる。まあ部屋の中でできる魔法だから、大した

ことはないけれど」

伏せる必要があるというのに、本当に大したことないのだろうか……。

不安は残るが、ハーヴェイを信じるしかない。エクレナは深呼吸をしてから座り込み、言われた通りに伏せると眼を閉じた。

「いいかい？ 指示をするまで眼は開けないように。それじゃ、そのまま動かないで」

ハーヴェイは呪文を唱え始めた。

長い長い呪文だった。いつも家でお茶を入れたり、薬を作ったりする時の呪文とは比べ物にならなかった。それだけ大変な魔法なのだろう。エクレナは息を殺してじっと待った。

ハーヴェイは呪文の最後の言葉と同時に、作った薬液を魔法陣に向かって放り投げた。すると薬液は魔法陣の外周から円錐形に蒸発しながら、大きな音を立てて爆発した。

魔法陣の中でのみ爆風が起こり、エクレナの身体を大きく揺さぶった。

だが、一瞬だったので倒れることなく済んだ。音こそ大きかったが、爆発自体は小さいものだったので家具や戸棚の瓶など、室内のものに影響はなかった。

「灯りを暗くするから、まだ眼は開けないで」

ハーヴェイがランプの炎を吹き消した。途端に辺りは闇に包まれたが、数十秒で眼が慣れた。窓からは月の光が射し込み部屋を照らしているので、物を判別することは容易にできる。いつの間にか外の風は和らいでいた。

ハーヴェイはエクレナのそばに行き、片膝を着いた。

「ゆっくりと眼を開けてごらん」

エクレナは四つ這いの体勢のまま、固く閉じていた瞼の拘束をゆつくりと解いた。

「……」

暗闇が広がっていた。

?? 何も見えない。

エクレナは鼓動が激しくなるのを感じた。魔法は失敗してしまった。ハーヴェイを以てしても無理だった??。

エクレナは動悸に囚われ、見えないと口にすることができなかった。無言のまま暫く同じ場所を見つめていると、何かが動いた気がした。エクレナは驚いて眼を凝らした。

ハーヴェイの足だった。時間とともにに輪郭がはっきりとしてきた。

「!」

エクレナは顔を上げた。すると眼前には薄暗くともよく分かる、顔立ちの整った美しい男性が微笑し、優しい眼差しでエクレナを見下ろしていた。

「!」

エクレナはまた言葉が出せなかった。どうしていいのか分からず、うろたえ涙ぐんだ。

「大丈夫だよ、エクレナ」

ハーヴェイは手を伸ばし、震えるエクレナを抱き寄せた。

懐かしい香りと温もりに、エクレナは思考が働き始めた。この人がハーヴェイ、愛する我が夫なのだと。

ハーヴェイに背中を擦ってもらい、エクレナは徐々に落ち着きを取り戻した。ハーヴェイの肩越しに部屋の中が見えると、エクレナ

は改めて眼が見える事実を認識した。

??今、私の眼は確かに世界を映している。本当に視力が戻る日が来るなんて。

今度は違う涙がエクレナの瞳を覆い始めた。

その時静寂を破り、いきなりドアが開いた。

ハーヴェイとエクレナが驚いてドアの方を見ると、ランプを手にしたシーナが立っていた。

「眠っていたのに大きな音がしたから、何かと思って来てみたら……」

シーナはハーヴェイの姿を見て、驚倒した。

「起こして済まなかったね、母さん。今、エクレナに魔法をかけていたんだ」

ハーヴェイは涼しい顔でそう言うと、エクレナを抱いたまま立ち上がった。

「お前、何年も留守にしておいて、夜中に挨拶もなしに帰宅かい！ 咎めるように言いながらもシーナは久々に息子を見て、泣き出しそうだった。」

「夜の内の方が、エクレナの眼にはいいと思ったから」

そう言ってハーヴェイはエクレナの身体を半転させ、シーナの正面に向けた。

シーナは、はっとした。そうだった、息子が帰る理由はひとつしかなかった。

「お義母様が……見えます」

エクレナは長年よくしてくれた義母の姿を初めて眼にして、涙がこぼれた。

「エクレナ……本当なのかい？」

シーナはランプをそばの棚に置き、微かに震えながらエクレナに近づいた。見ると確かにエクレナの瞳は、以前と違って強い輝きを放っていた。

「お義母様……！」

エクレナはシーナに抱きついた。シーナもエクレナを受け止めると、涙が溢れてきた。

「ああ、エクレナ、よかった……。よかったね」

シーナがエクレナの髪を撫でたその時、背後から小さな声がした。

「……母様？」

「お祖母様……？」

アルヴィンとミユリエルがドアの向こうから、恐る恐るこちらを覗いていた。シーナと同じく起きてしまっていたようだ。

二人の姿を見たエクレナは思わず大きな声を出した。

「ああ、アルヴィン、ミユリエル……！ 母様はあなたたちが見えるわ！」

「本当！？」

二人は勢いよく工房の中へ入ってくる。シーナはエクレナを子供たちの方へと促すと、エクレナは二人の目線に合わせて跪いた。

「本当よ。アルヴィン、あなたは私と同じ赤い髪をしている。ミユリエルは父様と同じ金色なのね」

エクレナは涙を拭うのも忘れ、二人の頭を撫でた。

「当たってる！」

「母様すごい！」

二人は驚嘆の声を上げた。

しかし、二人よりも驚いたのは、ハーヴェイだった。

「母様、父様って、まさか……」

ハーヴェイはあまりの驚きによるめいてテーブルに手を着くと、エクレナの向こうの小さな来訪者を見つめた。

「そうだよ。エクレナが母親なら、父親はお前以外に誰がいるんだい」

シーナが呆れんばかりに息子に告げた。

「驚いた……」

ハーヴェイは脱力して椅子に座り込んだ。

「何故何も言ってくれなかったのさ、エクレナ」

「あら、誰かさんは手紙の一通もくれないし、帰ったと思ったら、まず魔法って言って話す余地なんてなかったじゃない」

エクレナは涙を拭ってハーヴェイに向き直り、笑った。

「……」

ハーヴェイは参った。という顔をしていた。

「ほらアルヴィン、ミユリエル。あの人があなたたちの父様よ。帰ってきたの。母様の眼を治してくれた、大魔法使い」

エクレナは子供たちの背中を優しく押して、ハーヴェイに近づけた。

「アルヴィンが兄で、ミユリエルが妹の双子の兄妹。ハーヴェイが旅立ってすぐ妊娠が分かったの。だから今、四つになるわ」

子供たちは初めて見るその人を、恥ずかしそうに見つめた。

ハーヴェイもなんだかくすぐったく、特に痒くもないのに頭を掻いた。小さな可愛い二人の姿は、よく見れば見るほど、確かに自分に似ているとハーヴェイは思った。

「と、父様……」

二人は手を繋いで、もじもじしながらハーヴェイをそう呼んだ。あまりの愛らしさにハーヴェイは椅子を倒して二人に抱きついた。「こんなに可愛い子たちが待っていてくれたなんて……。長いこと留守にしている、済まなかったね。父様はもう、何処にも行かない

よ」

そう言ってハーヴェイは強く二人を抱き締めた。

ハーヴェイにとっても子供たちにとっても、初めて感じる温もりだった。

「父様、痛い……」

「ああ、ごめん。つい力が入ってしまっ」

ハーヴェイが慌てて二人から腕を離れた。

「ふふふ。普段はスマートなハーヴェイが扱いに戸惑ってる」

エクレナが笑い、シーナが笑った。

「今日はなんて日なんだ。嬉しいことがありすぎて、眠れそうになりよ」

ハーヴェイはそう言っ立ち上がった。

「さあ、お前たちはもうベッドに戻りなさい。朝になったらゆっくり父様と母様に甘えたらいい」

シーナが子供たちを寝室に促した。

「はい、お祖母様」

「ハーヴェイもエクレナも今日はもう休んで、明日ゆっくり話をなさい」

「はい」

「そうするよ」

「母様、父様。おやすみなさい」

「おやすみ」

ドアが閉まり、工房はハーヴェイとエクレナの二人きりになり、静寂が戻った。

「……そうは言っても、興奮して眠れそうにないよ」

ハーヴェイが苦笑して呟くと、エクレナも同意した。

「私も。せつかく見えるようになったのに、すぐに眼を閉じてしまうのは嫌だわ」

「よし、じゃあ風も大分収まったようだし、二人で外を歩こうか」
「ええ」

二人は月光の下を歩き出した。

山間部に位置するこの場所は他に集落もないので、夜ともなると闇に吞まれてしまうが、今宵の満月は不思議と明るく、灯りを持たずとも充分だった。

木々の葉を全て振り落とすかのように荒々しく吹いていた風は、もう枝を揺らす程度になっている。しかし、上空をゆく風はまだ勢いが強く、どんどん雲が流されていく。時折月が隠されて暗くなるが、視野を遮るほどのものではなかった。

エクレナは広がる視界に胸が高鳴った。?? 広大な夜空。草木生い茂る丘。ここが今、住んでいる地。そこを一步一步、自分の足で歩いている。

「エクレナの手を引かない外出は初めてだね」
「本当ね」

そう思うと、エクレナは走り出したい衝動にかられた。

だが隣を歩くハーヴェイを改めて眺めて、眼を奪われた。美形だとは聞いていたが、想像よりもずっと美しかった。

金色の髪は月に照らされ輝きながら風に靡き、きりりと締まった二重瞼の奥の瞳は紺碧に濡れ、均整のとれた身体についた長い脚は、嫋やかに地表へと伸びている。

更にハーヴェイは異国で四年を過ごし、精悍な顔つきになっていた。

しかし、エクレナは以前のハーヴェイの顔を知らないのです、その変化に気付くことはできなかったが、知っていればより強く惹かれたに違いない。

そんなエクレナが初めてハーヴェイを眼にして、一番心惹かれたのは彼の長くて繊細な指だった。この指にいつも触れられていたのかと思うと、エクレナはどきまぎしてきた。こんなに美しい人が自分の夫なのかと、今更ながら信じられなかった。

そういえば、私はまだ自分の姿を見てはいない。十五で記憶が止まったままだ。十四年経っていようと、何もしていないのだから何も変わっていないだろう。いや、退化はあっても進化はしていないだろうと言う方が、きつと正しい……。

エクレナは自分の容姿を想像し、見る前から落胆した。

そしてエクレナは立ち止まると、スカートの裾をつまんで広げて眺めた。昔、母親が着ていたような地味な服だった。

見えないから服などは全て母親が用意してくれたものしか持っていなかった。化粧もしていないし、髪だっていつもさつと梳かして、一つに束ねてしまう。

気にしたことなどなかったが、ハーヴェイを前にしてエクレナは急に恥ずかしさを覚えた。

「どうしたの？」

隣を歩いているはずのエクレナが後ろで立ち止まっていることに気付き、ハーヴェイは前方から声を掛けた。

「……」

私はあなたと釣り合いが取れていない??。

そう言おうとしてエクレナは堪えた。せつかくの日だというのに、水を差す。

「分かった」

ハーヴェイは何故かそう言うと、エクレナの許へ歩き出した。

「エクレナも素直じゃないなあ」

ハーヴェイは徐にエクレナの手を握って微笑んだ。エクレナは言っている意味が分からず、眼をぱくりさせた。

「やっぱり今までみたいの手を繋いでいたいなら、早く言えばいいのに」

ハーヴェイは笑いながらエクレナの手を引いて歩き出した。

最初は呆気にとられたエクレナだったが、嬉しい勘違いにはかむと、そういうことにしておこうと思った。

「ねえ、ハーヴェイ。向こうでの暮らしはどうだったの？」

「住処を探すのには時間がかかったけど、それなりに順調だったよ」

「体調を崩したりとか、身体は何ともなっていない？」

「大丈夫だよ」

「じゃあ、どうして手紙の一通もくれなかったの？ 子供のこと、

伝えたかった」

エクレナは少し責めた。

「……」

ハーヴェイは前方を向いたまま、ゆっくりと立ち止まった。

「そういう話を聞いてしまったら、戻りたくなるから」

ハーヴェイは哀しげに眼を伏せた。

「何もかも投げ出して、帰りたくなってしまったら駄目なんだ。必ず魔法を完成させて帰ると決めて家を出たのに、無駄に終わらせてしまう。だから、一切の情報を遮断した」

「……」

エクレナはハーヴェイの横顔を黙って見つめ、言葉の続きを待った。物憂げなハーヴェイは益々美しく、妖艶なほどだった。

「僕は昔から弱かった。いつも誰かに何かを与えられるのを待っていたように思う。呪いにかかった時は部屋に引き籠って母さんに引越しを余儀なくさせてしまったし、恋愛だって好意を寄せてきた女性しか対象としてこなかった。相手が逃げ出したらそれでもうおしまい、分かって貰おうとは思わずに、分かってくれる人を待っていた。僕は臆病だったんだ」

ハーヴェイは夜空を見上げた。

「でもエクレナと出会ってから、少しずつ意識が変わっていったんだ。誰かのために何かをしたい、自分から動きたい。そう思うようになった。エクレナは弱く醜い僕を受け入れてくれた。エクレナは僕の心に色んなものをくれたけど、僕は何もあげられなかった。だから君の視力を元に戻すことが僕にできる最大のお返しだと思った。失明の原因が病気や直接眼球に関わるものじゃなかったから、必ず治せると思ったんだ」

ハーヴェイはエクレナに向き直ると、神妙な面持ちで言った。

「連絡を絶っていたのは僕の弱さを隠すためだったけど、少し長過ぎたね。ごめん。不安にさせて済まなかったと思ってる」

「……」

エクレナは言葉にならなかった。自分の方こそ何かしてもらえばかりで、与えてなどいないと思った。

「……ハーヴェイ、ごめんなさい」

やっとの思いでそれだけ口にした。

「何でエクレナが謝るのさ」

「だって、私の方こそ何も……」

涙で言葉が途切れた。

「また泣く。エクレナは色々してくれたって言ったじゃないか」

「でも……」

「僕の好きなエクレナはそんなに泣かなかったよ。まあ、僕のせいだと言われると、否定できないんだけど」

ハーヴェイは苦笑した。

エクレナは堪らずハーヴェイの胸に抱きついた。

「眼が見えるようになった私は、ハーヴェイに何をしたらいいの？」

「……生涯そばにいてくれれば、それだけでいいよ」

ハーヴェイは優しく左手をエクレナの腰に腕をまわし、右手で髪を撫でた。エクレナは子供のように声を上げて泣いた。

エクレナが落ち着きを取り戻すまで、ハーヴェイは何も言わずに髪を撫で続けていた。

今日はそればかりしてもらっているな、とエクレナは赤い鼻で思った。

「泣いてばかりでごめんなさい。もう大丈夫……。ありがとう」

エクレナは反省して身体を離れた。

「じゃあ、歩こうか」

ハーヴェイは微笑むと、二人は再び手を繋いで歩き出した。

「ねえハーヴェイ、覚えてる？　あなたが初めて私を家に連れてきてくれた時のこと」

「ん？」

「行きたいところがあれば、僕が連れていくって言ってくれたの」

「……随分、昔の事のように感じるな」

ハーヴェイは追憶した。

「気持ち嬉しかったのだけど、その時本当は、見えないから行きたい場所なんかなかったの。でも今は違う。色んなところへ行って、色んなものを見たいわ」

エクレナは夜空を見上げ、眼を輝かせながら言った。

「うん」

ハーヴェイは穏やかに微笑んで、エクレナを見つめた。

「ハーヴェイと一緒に」

エクレナはそう続け、ハーヴェイを見つめた。二人は眼が合った。

ハーヴェイは立ち止まると、繋いだ手をゆっくりと引き寄せてエクレナを抱き締めた。

「うん。僕はもう何処へも行かない。これからは、二人で一緒に同じものを見よう」

それを聞くとエクレナは安心したように眼を閉じた。

月に見守られながら、二人は長年の空白を埋めるように互いの温もりを確かめ合った。

八

瞼を開くと、エクレナはあまりの明るさに眼が眩みそうになった。陽の光が包み込む世界、これが朝なのだと実感した。

「おはよう」

ハーヴェイがまだ眠たそうに横になったままエクレナに挨拶をした。

「おはよう。今日もちゃんとあなたが見えるわ」
エクレナは微笑した。

結局明け方まで起きていたので、幾らも寝ていなかった。しかし、エクレナは眼を開けていることに今日ほど幸せを感じたことはなかった。

「随分陽が高いようだけど、今何時だろう」

ハーヴェイが起き上がって伸びをした。エクレナははっとした。そう言えばいつものような鳥の囀りが聞こえない。急いで着替えて洗面所に向かった。

ドアを開けると、洗面台の前には最後に鏡を見てから十四年後のエクレナがいた。

「……お帰りなさい、エクレナ」

鏡に向かって呟いた。

笑ってみた。眉をしかめてみた。まじまじと見つめてみた。

十四年経ってもやはり地味な顔は地味なままだった。予想はしていたが、少しだけ落胆し、やはり化粧道具を揃えなくなった。

「おはようございます！ 遅くなりました」

エクレナは急いで居間の扉を開いた。居間にしかない柱時計の針は、すでに十時を回っていた。

「おはよう！ 母様」

「母様、遅い」

アルヴィンとミリエルがエクレナに飛び付いた。

「ごめんね。母様寝坊してしまったの」

エクレナが苦笑して二人の頭を撫でると、二人は母を見上げて呟いた。

「……母様のおめめ、違う」

「うん。違う」

エクレナも我が子の顔をじっくりと見つめ返した後、微笑んだ。

「そう、母様はもう、あなたたちのことがしっかりと見えるのよ。だから、いたずらをしたらすぐに分かるからね」

親子三人は笑い合った。

「おはよう、エクレナ。ハーヴェイはまだ寝ているのかい？」

シーナが台所から出てきた。

「いえ、起きてますので、もうすぐ来ると思います。起きるのが遅くなりまして申し訳ありませんでした。あの、この子たちの朝食は……」

「僕たち、もう食べちゃったよ」

「母様たちは遅いから、お祖母様が先に食べなさいって」

……やってしまった。エクレナは天を仰いだ。こんなに朝寝坊したのは、嫁いだから初めての事だった。

「昨夜は色々あったから眠れなかったんだらう？ 食事の用意はもうできているから、座りなさい」

「申し訳ないです……」

「構わないよ。それより、本当に見えるようになったんだね」

シーナは感慨深げにエクレナの瞳を見つめた。

「はい。ハーヴェイのお陰です」

二人は微笑んだ。

「おはよう」

ハーヴェイも居間に入ってきた。

「あっ……」

子供たちは緊張して固くなった。昨夜抱き合ったとはいえ、まだハーヴェイを見るのは二度目なのだ。

「……アルヴィン、ミユリエル」

ハーヴェイは遠巻きに自分を見つめる子供たちを手招きして呼んだ。

「父様におはようは言ってくれないのかい？」

まだ慣れないので、二人はもじもじしている。しかし、眉目秀麗なハーヴェイに見つめられると子供であっても参るものを感じた。意を決し、ミユリエルが先に口を開いた。

「父様、おはよう……」

はにかみながら挨拶すると、ハーヴェイは両手を伸ばしミユリエルを抱き上げた。

「おはよう、ミユリエル。いい子だ」

ハーヴェイは自分の頭上までミユリエルを掲げ、くるくると回った。初めてこんなに高く抱き上げられたミユリエルは、きやつきやと、はしやぎ声を上げて歓んだ。

「いいな、僕も僕もー！」

アルヴィンがハーヴェイの足許で羨ましさを口にした。

「それじゃアルヴィン、ちゃんと挨拶してごらん」

ハーヴェイはミユリエルを降ろすと、アルヴィンの方を向いた。

「おはよう、父様！」

「おはよう。じゃあ、おいで」

ハーヴェイが破顔して両手を伸ばすと、アルヴィンが飛び込んだ。高く抱き上げて回ると、アルヴィンも嬉しそうに声を出して笑った。

「ハーヴェイ、そのくらいにして食事は早く済ませなさい」

シーナが窘めると、ハーヴェイは子供たちにまた後でと頭を撫でて、食卓に着いた。アルヴィンとミュリエルは興奮を分かち合った。

「母さん、エクレナ。今日は店は休みにして、皆で出掛けよう」

ハーヴェイはナイフでチーズを切りながら提案した。

「そんなこと言って、お前たち寝不足なんだろう。今日一日ゆっくりしていた方がいいんじゃないのかい」

「大丈夫だよ。久しぶりに家族が揃ったんだし、天気もいいから出掛けられない手はないよ。エクレナは外を見たいだろうし、子供たちだってまだ遠出したことないんだろう？」

ハーヴェイはチーズをパンに載せると、最後はエクレナに尋ねた。

「ええ」

エクレナが答える。

「じゃあ決まりだ。アルヴィン、ミュリエル。今日はみなでお出掛けしよう」

「お出掛け？」

「遊べるの？」

「そうだよ。もう父様はずっと家にいるし、母様の眼も見えるから、これからはたくさん外で遊べるよ」

「やったあ！」

はしゃぎ出す子供たちを見て、エクレナは眼を細めた。心から幸福に思い、安堵した。

今朝目覚めたら、晩に起きた出来事は全て夢だったらどうしよう

と、不安が消えなかった。だから眼を閉じるのが嫌で、明け方までハーヴェイを付き合わせてしまった。疲れていたらうに、そこまで考えが回らなかった。ごめんなさい、ハーヴェイ。そして本当にありがとう。

エクレナは心の中で謝意を表した。

＊

一家はエクレナの眼が見えるようになったことを、彼女の両親に知らせに行くことにした。

ハーヴェイは工房から椅子を二つとロープを持ってくると、馬に魔法をかけた。すると四人は優に座れる馬車に変身した。子供たちははしゃぎながら馬車に乗り込み、流れゆく景色を物珍しそうに眺めた。エクレナもまた、飽きることなく景観をその眼に焼き付けた。

ライザの町に着くと、十数年振りの光景にエクレナの視界は懐かしさと新鮮さが同居した。その空気をも取り込もうと、エクレナは無意識に深呼吸した。

「母様、あそこ人がいっぱいいる」

ミリエルは左手でエクレナのスカートの裾を掴み、右手で市場の方を指差した。

「行きたい！」

アルヴィンは懇願したが、ハーヴェイが穏やかに制した。

「まずは親戚のみんなに母様のお披露目をしてからだよ。後で寄るから、少し我慢だ」

子供たちは後ろ髪引かれる思いだったが、後で寄ると言われたので素直に従った。

エクレナの実家に着くと、迎えた母親は腰を抜かさんばかりに驚いた。エクレナは結婚式の時のように号泣するのではないかと思っていたのだが、すぐに市場で働く父親に知らせに走り、飛んできた父親の方が泣き崩れた。

彼らはエクレナのためにハーヴェイが尽力した話を聞き、今日ほどハーヴェイとの結婚を飲んだことはなかった。

「こんなめでたい日に仕事なんかしてられるか！　すぐに宴会だ！」

号泣していた父親は涙を拭くと、エクレナの弟妹たち家族も呼び寄せて昼間から祝宴を開いた。

普段は飲まないエクレナやシーナも、この日ばかりは少々酒を嗜んだ。子供たちは思いがけないご馳走に舌鼓を打った。

両親は今晚泊まっていけばいいと勧めたが、明日は店を開けなくてはならないし、子供たちに市場を見せる約束だからとエクレナは勧めを断り、夕方で帰ることにした。

帰る頃には父親は泥酔して周りにくだを巻き、まともに会話ができる状態ではなかったが、母親は戸口でそっとエクレナを抱き締めた。

「エクレナ、本当にハーヴェイと出会えてよかったね」

母親は涙腺が緩んでいた。

「……はい」

エクレナは幸せを噛み締めた。

エクレナが家を出ると、先に表に出ていた四人は少し離れたところで待っていた。子供たちのために見晴らしのよい場所に移動した

ようだった。

追い付くためにエクレナが走り出すと、気付いた子供たちは追い付かれないよう面白がって駆け出した。

「危ないからあんまり走っては駄目よ」

エクレナは子供たちに注意した。

「さっきからずっと、うずうずしていたから、彼らには回避の魔法をかけておいた。だからちよっとくらい走り回っても心配ないよ」

ハーヴェイが笑った。

ぶつかりそうになったら、兵隊のような動きになるあれか……と、エクレナは過去の自分を思い出した。兵隊の動きはハーヴェイの悪ふざけなのだが、エクレナには常にその状態でかけられていたので、それが当たり前の魔法なのだと思っていた。

「さて、何か食料でも買って帰ろうかね」

市場に入ると、シーナは野菜や果物が並ぶ店で立ち止まった。エクレナも一緒に店を覗いていると、ハーヴェイが前方でエクレナの名を呼んだ。

「どうしたの？」

エクレナが人混みをかき分けハーヴェイに近づくと、彼はアクセサリーの並ぶ店の店主に捕まっていた。

「これ、きつとエクレナに似合うよ」

ハーヴェイは花を型どった可愛いネckレスを両手で持ち上げると、エクレナに見せた。

「いい品ですよ。ええ、きつとお似合いですわ」

小太りの女店主は、にこにこしながらエクレナを見ている。

「ちよっと合わせてみなよ」

「でも……」

エクレナはお洒落を意識する頃に眼が見えなくなったので、アク

セサリーなど着けたことがなかった。

「さあ、遠慮せずに。どうぞ、どうぞ」

躊躇うエクレナを店主は半ば強引に引き入れて鏡の前に立たせると、ハーヴェイが後ろからネックレスを首に回した。

「ほら」

エクレナは初めてネックレスを着けた自分を見て、頬を紅潮させた。

「よくお似合いですよ。でもそれは小振りでちょっと地味だから、こっちななかどうかしら」

店主は手元の引き出しから大振りの石がじゃらじゃらと付いた派手なネックレスを取り出すと、二人の前に差し出した。

エクレナはぎよっとした。とても似合いそうにない。

「ありがとうございます。でも折角ですが、妻にはこちらの方が似合うと思いますから」

ハーヴェイは穩便に勧めを断った。

ほっとしたエクレナは改めて鏡を見ながらネックレスに触れたみた。小さな石は傾きかけた陽の光を反射して、きらきらとして綺麗だった。エクレナは小さく感嘆の溜め息を洩らした。

「これ下さい」

エクレナの表情を見てハーヴェイが店主に伝えた。

「ありがとうございます」

「待って！ 駄目よ、無駄遣いは」

エクレナは慌ててネックレスを外そうとした。しかし、慣れていないので首の後ろの小さな金具を外すのはなかなか上手くいかなかった。

「そのまま着けて帰ればいいよ」

ハーヴェイはくすくすと笑うと、店主に代金を渡した。

「今後もご贔屓に」

ハーヴェイはもたつくエクレナの手を引いて店を出た。

「ハーヴェイ」

「無駄遣いじゃないよ。せつかく眼が見えるようになったんだから、お祝いだ」

「……」

「気に入らなかった？」

エクレナはぶんぶんと首を横に振った。無駄遣いは駄目とは言ったが、欲しくないとは言えなかった。

「……ありがとう。嬉しい」

エクレナはハーヴェイの優しさに打たれ、下を向いた。

「そうそう。素直が一番」

ハーヴェイは子供にするようにエクレナの頭を撫でた。

「父様ー！ 母様ー！」

向かいからアルヴィンとミュリエルが走って来た。

「すごい！ 兄様が空を飛んだの！」

ミュリエルが興奮しながら報告した。

「え？」

エクレナは意味が分からなかった。

「転びそうになったのに、転ばなかったんだ！」

「兄様が飛んで、元に戻ったの！」

子供の説明は言葉足らずだったが、要は走っていて躓いたのに、地面に手を着く前に身体が浮いて、体勢が元に戻ったらしい。

「アルヴィン、それは父様がね……」

エクレナが真相を話そうとすると、ハーヴェイが割り込んだ。

「すごいぞ、アルヴィン！ さすがは父様の子だ。大魔法使いの素質がある！」

「やったあ！」

褒められてアルヴィンは飲んだ。ミユリエルも一緒になって飲んでいる。

エクレナは溜め息を吐くと、無邪気に笑い合う親子を仕様のないという優しい眼差しで眺めて言及は避けた。

＊

一日はしゃぎ回ったせい夕食の途中で子供たちは、うとうとし始めたので、見兼ねたエクレナが寝室に連れていった。

ハーヴェイは食事を終えると、伸びをしながら居間のソファに腰掛け、大きな欠伸をした。

「お前たちも今日こそは早く休みなさいよ」

シーナが窘めるように言った。

「うん。??ねえ母さん、僕はいくつの時から魔法を使えた?」

ハーヴェイはソファの背もたれに肘を掛け、シーナの方を向いた。

「ええ?　いくつだったかねえ。……確かあの人が昇進した時だから、六つの時には洗濯物を飛ばして遊んでいたね」

シーナは懐かしそうに遠い眼をした。

「そうか、六つか。アルヴィンは筋がいいかもしれない」

「何かあったのかい?」

「人混みで転ばないようにかけておいた回避の魔法、効果が少し変わっていたんだ。空を飛んだって帰りに騒いでいた、あれ。満更誇張された話じゃないかもしれない」

「回避の魔法なら確かに、転びそうになる前に転ばないように作用するはずだね……」

ハーヴェイは背もたれに掛けた方の腕で頬杖をつく、にやりとした。

「明日から色々教えるとするかな。磨けば光る原石は大切にしないと」

「誰かさんみたいに禁忌の魔法に手を出さなきゃいいけど」

シーナがぴしゃりと言い放つと、ハーヴェイは痛いところを突かれたという顔をした。

九

ハーヴェイは城の研究室での職に復帰した。
ネイハムの計らいもあったが、失明者の視力を取り戻したことは大きく評価され、助手ではなく役職に就いた。

それを受け、晩に家族が揃った食卓でシーナは一つ提案をした。
「ハーヴェイの呪いは解けたし、エクレナの眼も見えるようになった。この家にいつまでも住む理由はもうない。城で働くのなら、城下町に引越した方がいいと思うんだ」

言われてみればそうだった。元々は人目を避けるためにここに来たのだ。もう避ける理由もないし、エクレナも眼が見えるので新しい環境に変わっても、すぐに対応ができる。

「そうだね。じゃあ、みんなで城下町へ行こうか」
ハーヴェイが賛成した。

「お城に住めるの？」
アルヴィンが勘違いした。

「違うわ、お城のある町に引越すのよ」

エクレナが笑って説明をした。

「いつ？ いつ？」
ミュリエルがわくわくしながら問い掛けると、

「店の常連の人たちに知らせる期間があるね。母さんの都合でいいよ」

と、ハーヴェイはシーナに委ねた。するとシーナは意外な返答をした。

「私はここに残るから、お前たちの好きな時に行きなさい」
「え？」

四人は思わずカトラリーを持つ手が止まった。

「……何故、お義母様は一人に残るおつもりなんですか」

エクレナは合点がいかずに、思わず厳しい口調になった。

「城下町で私の店を開くことはできないからさ。あそこには優秀な魔法使いがたくさん住んでいる。私が作れるような薬は、もうすでにあるからね」

「じゃあ、お店を畳むというのでは駄目なんですか」

「ずっとこの仕事を続けてきたからね。もう私の生き甲斐になっているんだ。それに遠くから買いにくるお客さんがいるうちは、まだまだ頑張らないと。身体が動かなくなるまではやるつもりさ」

「それじゃあ、引越しはなしです」

エクレナはナイフとフォークを置いた。

「ハーヴェイはもう助手でなくなったから、責任も重くなってこれから益々忙しくなる。ここから通うより、もっと近い場所に越した方がいい。子供たちにとっても、こんな何もないところより、都会の方がいい」

シーナは断言した。

「アルヴィン、ミユリエル。お祖母様と離れるなんて嫌よね？」

嫌ではあったが子供たちはお城には行ってみたかったので、エクレナの問いにすぐに返事をできなかった。

「ふふふ。決まりじゃないか」

「駄目です！」

エクレナは激しく反対した。

「どうしたんだい、エクレナ。何故そんなにむきになるんだ」

シーナは驚いてエクレナを見つめた。

「失礼ですが、お義母様はもう高齢です。一人で暮らすのには賛成

できません」

「高齢と言っても、まだまだ元気だよ。薬作りが生業の魔法使いを
嘗めてもらっちゃ困るねえ」

シーナはからかうような口調で言った。するとエクレナはテーブルの上に拳を握り、下を向いた。

「ずっと一緒に暮らしてきたのに……何故そんなことを言うんですか。眼が見えない間、ハーヴェイがいない時も子供が生まれる時もお義母様はずっと私を支えてくれました。それを急に離れるなんて……私は絶対に嫌です！」

語尾の部分で、エクレナはテーブルを叩いた。子供たちはびっくりしてスプーンに載せていたマッシュポテトを落とした。

「エクレナ……」

シーナは俯いたままのエクレナを見つめた。

「……すみません、食事中に取り乱したりして。少し頭を冷やします」

エクレナは席を立つと部屋を出て行った。

子供たちは、ただならぬ雰囲気につきり食事の手が止まってしまっていた。

「ほら、母様なら大丈夫だから、ちゃんと最後まで食べなさい」

今まで黙っていたハーヴェイが子供たちに水を向けると、戸惑いながらも二人は食事を再開した。

「ご馳走様。母さん、この話はまた後でちゃんとしてよう」

そう言ってハーヴェイも席を立ち、エクレナの後を追った。

「……」

シーナは冷めてしまった皿の上の料理を黙って見つめていた。

「エクレナ、入るよ」

ハーヴェイはノックの後、寝室に入った。

エクレナは俯いたままベッドに腰掛け、ハーヴェイの方は見なかった。

「……エクレナは、母さんのことを大切に思ってくれているんだね」
ハーヴェイはエクレナの隣に腰掛けた。

「お義母様は私や子供たちの面倒を見るのは、本当はずっと迷惑だったのかしら」

エクレナは自分の哀しい言葉に涙ぐんだ。ハーヴェイは優しくエクレナの肩を抱き寄せた。

「違うよ。母さんだって大切に思ってる。思ってるからこそ、あんなことを言っただんだ」

「どうということ？」

「子供たちのためには確かにここより町に移った方がいい。勉強するのに本も材料もすぐに手に入るし、友達もできる。エクレナだって買い物に出るのに便利になるし、もう眼が見えるんだから、積極的に外に出て行って見聞を広げた方がいい。でも自分は店を捨てられない。そうすると、自分が一人残りさえすれば丸く治まると思っただんだよ」

「でももうお年なのに、こんな僻地で一人暮らしはさせられないわ」
「そこで考えたんだけどさ……」

子供たちが寝静まった頃、ハーヴェイとエクレナはシーナを居間に呼んだ。

「引越しの話だけど、城下町じゃなくて、ライザに皆で移ればいいと思うんだ」

ハーヴェイがそう切り出すと、エクレナが続いた。

「ライザなら魔法使いはいません。それに母はずっと父の膝痛の薬

を買いにきています。お義母様がライザで店を開いてくれれば、父母も助かります」

「でもライザじゃ、ここよりも城へ行くのが遠くなるじゃないか」
「僕なら大丈夫だよ。まだ若いし」

「いや、遅くなるのが続けば、お前はその内に泊まり込みばかりするようになるだろう。毎晩飲んで帰った前科があるんだ。駄目だね」
シーナは反対した。

「あれは飲みたいからじゃなくて、情報が欲しいからだったのに、信用ないなあ」

ハーヴェイはうなだれた。

「それじゃ、やっぱり引越しはなしで……」

エクレナが結論を出そうとすると、シーナが妨げた。

「それじゃあ子供たちのことが解決できていないよ」

「でも……」

「分かった。それじゃ、こうしよう。私がライザに移る。お前たちは城下町に住む。これでどうだい」

「それだと一人暮らしをすることに……」

エクレナが反論しようとする、再びシーナが妨げた。

「ライザならエクレナの家族もいるし、何かあればお互い助け合っているよ」

シーナは微笑んだ。

「……」

エクレナはハーヴェイの方を見た。ハーヴェイは腕を組んで、暫く考えた。

「……まあ、ライザなら会いたくなったらすぐに会いにいける距離だ。エクレナは寂しいかもしれないけど、母さんも頑固だからね。そうするでしょう」

「よし、決まったね」

シーナは立ち上がった。

「じゃあ、僕はそろそろシャワーを浴びて寝るよ」

ハーヴェイも立ち上がり、居間を出た。

「……」

エクレナは一人座ったままだった。

「エクレナ」

居間を出ようとしていたシーナが立ち止まり、エクレナを呼んだ。

「お前は優しい子だ。嫁いできてくれて、本当に感謝している」

シーナはエクレナに歩み寄った。

「ハーヴェイが戻ってきて思ったんだけどね、あの子は異国へ行つて大分成長した。だけど、ここにいると気が抜けるのか、まだまだ甘えている節がある。いまいち頼りなくてねえ……。私としては子供もいるんだから、これからは夫婦で支え合って自分たちの家庭をしつかりと築いて欲しいんだよ」

シーナは慈愛に満ちた表情でエクレナの手を握った。

「お義母様……」

「寂しくなったら、いつでも会いにくれればいいさ」

エクレナはシーナに抱きついた。

＊

二週間ほどして、引越しの日がやって来た。

転居方法は先にシーナをライザに送り、その翌日にハーヴェイたちが城下町へ赴くことにした。

「エクレナ、ちょっと」

シーナがエクレナを自室に呼んだ。

「これ、貰ってくれないかい」

シーナは自分の使っていた鏡台の前にエクレナを導いた。蔓植物の彫刻が鏡を縁取るように施され、古いが美しい立派な品だった。

「もう眼が見えるんだから、必要だろう」

「でも頂いてしまったら、お義母様のは……」

「私はライザで新しいのを調達するよ。お古で悪いけど、これはちよっと魔法がかかっているみたいだね。エクレナが持っていないと駄目なんだよ」

「魔法が？」

「まあ、あとはハーヴェイに訊いとくれ」

「もう荷物は全部積んだー？」

ハーヴェイが表から声を掛けた。

「ああ、全部済んだよ！」

シーナは届くように大きな声で返事をした。

「それじゃ、そろそろ行こうかね」

エクレナは歩き出すシーナの手を取った。

「ありがとうございます。大切にします」

二人は微笑んだ。

「じゃあね、アルヴィン、ミュリエル。父様と母様の言うことをよく聞いて、いい子に頑張るんだよ」

「はい、お祖母様」

シーナは二人の孫の頭を撫でた後、馬車に乗り込んだ。

「気をつけて」

ライザの町に着いたら、エクレナの家族が皆で引越しを手伝う手筈になっているので、エクレナと子供たちは留守番となった。

「じゃあ、行ってくる」

ハーヴェイが馬車を出した。

シーナと荷物を載せた馬車が遠ざかっていく。今生の別れではないが、エクレナは寂しさに涙ぐんだ。ハーヴェイが戻ってから随分涙脆くなってしまったなと思いながら、エクレナは小さくなる馬車を暫く見つめ続けた。

「母様」

馬車が消えても尚、見つめたままの母を見上げてアルヴィンが声を掛けた。

エクレナは、ごみが入っただけだというように軽く眼を擦ると、すぐに顔を上げ子供たちに笑いかけた。

「さあ、私たちも荷物をまとめないとね。二人とも手伝ってちょうだい」

子供たちは元気よく返事をし、三人は家に入った。

ハーヴェイは夜になって帰宅した。

「ただいま」

「父様、お帰りなさい！」

「父様、遊んで！」

子供たちはハーヴェイに抱きついた。

「なんだい、すごい勢いだなあ」

ハーヴェイはライザでシーナとエクレナの家族とで食事を済ませたため、子供たちは父も祖母もない食卓に意気消沈していたのだった。

「駄目よ、父様は疲れているの。明日はまた引越しだし、今日は我慢なさい」

エクレナが咎めると、子供たちは不満の声を上げた。

「じゃあ、お風呂で遊ぼう。父様が魔法でシャボンをたくさん飛ばしてあげよう」

ハーヴェイが気を利かすと、子供たちは両手を上げて飲んだ。

「お風呂なら私が入れるから、ゆっくりすればいいのに」

「大丈夫だよ。留守にしていた分、子供たちと触れ合わないとね。しかし、荷物が無いと随分がらんとしているね。この家も結構広かったんだなあ」

ハーヴェイは部屋を見渡した後、子供たちと浴室に向かった。

エクレナも家具も疎らな、がらんどくに近い部屋を見渡すと、軽く溜め息を吐いた。

この家にはたくさんさんの思い出が詰まっている。眼が見えない期間の方が長かったが、その分ひとつひとつ触れて覚えたのだ。今でも家具の配置は鮮明に思い出せる。

エクレナは見えなかった時のように手で触れながら家の中をゆっくりと歩いて回った。魔法が使えるのなら、この家と話をしてお礼が言いたいと思った。

最後にシーナの寝室だった部屋に入ると、ぽつんと佇む鏡台を見つめた。

?? 一体何の魔法がかかっているのかしら。

エクレナがそう思いながら鏡に触れると、浴室からハーヴェイの声が出た。

「エクレナー！ 上がったから子供たちの身体を拭いてー！」

「はい！」

エクレナは小走りで浴室に向かった。

＊

翌日、鏡台を運び出す前にエクレナはハーヴェイを呼んだ。

「ハーヴェイ、お義母様が昨日、この鏡台には魔法がかかっているって言っていたんだけど、ハーヴェイがかけたの？」

「ああ、そうだ。帰ってからずっとばたばたしていたから、すっかり忘れていたよ」

ハーヴェイはそう言うのと、呪文を唱えた。

すると鏡は、今映し出しているハーヴェイとエクレナの姿をぐにやりと歪ませ、徐々に違う形を映し始めた。

「！」

エクレナは新たに映し出されたものを見て、息を飲んだ。

「覚えてるかな、エクレナ。あの日、僕がかけた魔法のこと」

鏡の中には純白のドレスに身を包んだエクレナと、正装したハーヴェイの姿があった。

「結婚式の時の……あれは、本当の魔法だったのね」

「え、嘘だと思っていたの？」

「嘘というか、嘘え話なのかと思っていたの」

今日という日を永遠に焼き付ける魔法。それはお互いの心にしっかりと焼き付けるという意味だとばかり思っていたのに、鏡に焼き付けて本当に残していたなんて。

「あの日言った通り、エクレナのドレス姿、綺麗だろう？」

ハーヴェイは懐かしそうに微笑んだ。

「ありがとう……。ありがとう、ハーヴェイ」

エクレナは涙でもう鏡の中は見えなかった。

「父様、母様！ 準備できたよ！」

子供たちが部屋にやって来た。

「……母様どうしたの？」

二人が泣いているエクレナに驚くと、エクレナは釈明した。

「哀しくて泣いているのではないの。嬉しくて泣いているのよ」

「……」

子供たちは嬉し泣きというものがまだよく理解できなかったが、ハーヴェイも微笑んでいるので、とりあえず変事ではないのだと安心した。

「ほら、見てごらん二人共。これは母様と父様が結婚した時のものだよ。母様、とっても綺麗だろう」

ハーヴェイは子供たちに鏡を見せた。

「本当、綺麗……」

子供たちは鏡の中に見入った。ハーヴェイは涙に咽ぶエクレナの肩を優しく抱いた。

その鏡台は新しい家では居間に置かれ、褪せることなく晴れの姿の二人を映し続けた。

（完）

九（後書き）

お疲れさまでした。読んでくださり、ありがとうございました。

初めて書き上げた本当の意味での処女作です。かなり頑張りました。え、この程度で頑張ったの？　と思われたあなた。言い訳となりますが、小説家を目指したこともなければ同人活動すらしたことの無い、本当のど素人なのです。大目に見てやってください。

一番苦しんだのはタイトルです。キーワードを羅列して一生懸命組み合わせてみたんですが、どれもじっくりこない……。その中でも強いて選べばこれ、というのが正直なところなんです。なので、今からでもいいものが浮かんだら変えるかもしれません。

さて、作品ついて少し触れておきますと、一応西洋風ファンタジーなので、わざと言葉遣いを古めかしくしてあります。妙に名前を呼び掛ける会話とか、やけに手を握るとかは意識してやったんですが、諄かったでしょうか？

また人物名はイギリスがベースですが、あくまで架空の西洋？風？の設定です。時代も電気や自動車はないものとしましたが、トイレは設置しました。厳密に中世ヨーロッパとかにしちゃうと、生活描写に無理が出て破綻しそうだったのでやめました。何か背景の描写少くない？　と思った方。鋭いです。住居や生活小物等、もっと書いた方がいいのか悩んだんですが、前述の通りです。つまり作者の力不足ってことですね。

なんだか言い訳ばかりで恐縮ですが、未熟な出来だというのは重々承知です。その点も踏まえ、感想を頂けると幸いです。一体自分がどれほどのものを書けたのか見当もつかないんです。眼も当てら

れないのか、面白いのか。なので批評を頂ければ一層歓びます。

長くなりましたが、最後にもう一度。読んでくださって、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6026p/>

訪れ

2011年1月29日11時17分発行